

明 日 に 生 き る

—作文コンクール入選作品集—

第 22 号



平成 23 年度

東京都産業教育振興会

明 日 に 生 き る

第二十一号

—作文コンクール入選作品集—

明日に生きる 第二十一号 — 作文コンクール入選作品集 — 目次

講評

明日に生きる確かさを感じて
選考を終えて
表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

佳	最優秀賞	ブドウ畠からの贈り物	東京都立白鷗高等学校附属中学校	三年	小林	まりあ	5
作	優秀賞	働くということ	北区立十条富士見中学校	三年	小島	諒子	7
佳	優秀賞	働くということ	東京都立白鷗高等学校附属中学校	三年	林	日向子	8
佳	優秀賞	信頼の輪	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	中澤	萌	10
佳	作	私の夢	愛国中学校	三年	土田	桂子	13
佳	作	夢に向かって	愛国中学校	三年	山口	春花	15
佳	作	家庭科部に入つて	千代田区立神田一橋中学校	三年	前澤	温子	15
佳	作	震災で感じたものづくり	中央区立晴海中学校	三年	山田	達也	16
佳	作	私の将来の夢	墨田区立立花中学校	三年	番場	有紀奈	16
佳	作	職場体験で得たもの	目黒区立第八中学校	三年	笠田	有理	17
作	作	かつお節ロード	大田区立南六郷中学校	二年	中西	愛実	18
作	作	ボランティアと社会	北区立十条富士見中学校	三年	鈴木	紫央里	19
未来のために—貴重な三か月—	練馬区立大泉北中学校	二年	鈴木	優花	優花	21	23

高等学校の部

足立区立新田中学校	葛飾区立堀切中学校
葛飾区立堀切中学校	葛飾区立堀切中学校
東京都立白鷗高等学校附属中	東京都立武藏高等学校附属中
東京都立大泉高等学校附属中	東京都立大泉高等学校附属中
東京都立大泉高等学校附属中	東京都立大泉高等学校附属中
東京都立農産高等学校	東京都立瑞穂農芸高等学校
愛国高等学校	愛国高等学校
愛国高等学校	愛国高等学校
蒲田女子高等学校	蒲田女子高等学校
東京都立北豊島工業高等学校	東京都立忍岡高等学校
東京都立忍岡高等学校	東京都立忍岡高等学校

18

専修学校の部

佳

将来の夢

乍
ものをつくること

生命の輝きを支え続ける

作 人を良くする食について

作 農産高校に入学して

高校三年間で学び、今後活かしたいこと

作 つながり

力 邱

卷之三

賞
ものへぐりに關する考え

賞 私の進路・将来の夢

作 実習から学んだこと

覽表

ノケール選考委員名簿

2

青山製図専門学校
中央工学校
国際デュアルビジネス専門学校

ページ

明日に生きる確かさを感じて

中学校の部 選考委員長

小谷野 茂 美



中学校の部では、技術・家庭科の学習を通して体験したことや勤労に関わる体験的な学習によって学んだことなどをまとめた作文が一五五編集きました。審査に当たっては、

①作文の内容や題材が産業作文コンクールの趣旨に十分合致しているか。②作文の構成がきちんとなされ、伝えたい内容が読み手に十分伝わってくるか。③中学生の発達に即して言葉を適切に活用しているか。などの点を考慮いたしました。

作品は、職場体験やボランティア活動、技術・家庭科の授業などの体験をとおして学んだことを綴ったものが中心ではありましたが、本年度は、3月11日の東日本大震災がもたらした未曾有の被害を目の当たりにし、自然の力が計り知れないことへの驚きとともに、身近な仕事や技術を見直し活用することの大切さへの気づきや、節電の真の意味を問うものなど、中学生の視野が社会的な事象に合わせて広がったように感じました。

どの作品も、体験したことを見つかりに、物事に対する見方や考え方を深めて行くプロセスがよく分かるものでした。また、自分一人の体験は、自分が体験前には予想もしなかつ

た程の多くの人々に支えられていることを実感し、そのことを契機に、これから自分の歩む方向をしっかりと見定めた内容が印象に残りました。

いずれの入選作品も素晴らしいものでしたが、ここでは、最優秀賞に輝いた都立白鷗高等学校付属中学校 小林まりあさんの作品の一部をご紹介いたします。

ブドウを栽培している農家の体験が綴られていました。果物屋さんの店先に並べられ、きれいに房の揃ったブドウが当たり前のように思っていた日常から一転し、商品としてブドウがどのように栽培されているのかを、作業を通して実感したことが素直に綴られていました。消費者には見えないところで、多くの汗や苦労が重ねられている現実を感じながら、黙々と作業を繰り返すうちに、作業への使命感が湧き、作業をやり遂げている自分が存在することに気づく。こうした体験が、ものづくりの楽しさや働く喜びにつながり、体験を終えた今でも息づいていることが読み取れました。

入賞された皆さんの価値ある体験が、これから生き方に大きな影響を与えるであろうと思うと、皆さん一人一人の成長に大きな期待を膨らませずにはいられません。作品をお寄せくださいました皆さん、本当にありがとうございました。また、ご指導いただきました各学校の先生方、体験を支えていただきました保護者や事業所などの皆様に改めて感謝を申し上げ、選考のまとめといたします。

選考を終えて

高等学校・専修学校の部 選考委員長

松井 薫



平成二十三年度の東京都産業教育振興会作文コンクール「明日に生きる」の選考にあたり、選考委員を代表して講評いたします。

今年度は、高等学校九七作品、専

修学校一八作品、計一一五作品の応募がありました。そのなかから一次審査で高等学校は一九作品、専修学校四作品を一次審査作品と致しました。昨年と大きく異なる点として、漢字の使用等における機械作業と手作業を適正に評価するため、ワープロ作品と肉筆作品と分けて一次審査を行いました。二次審査は統一審査とし、最優秀一、優秀五、佳作一三を、題材や内容、文章の構成を総合的に評価し、選定いたしました。

作文はまず題材の取り上げ方が課題となります。しかし、

人は、自分の体験したことや歩いてきた自分の道を振り返り、その時々の自分の心の動きに思いをはせ、自分を見つめなおします。さらに、言語による表現に取り組みながら、新しい自分自身の一歩を踏み出す力とするのが作文です。

「明日を生きる」この言葉を深く感じ、考えてください。今回の入賞作品は、踏み出す決意・心意気を、借り物ではなく、自分自身の言葉を使って表現し、伝える心をもつて綴られています。

題材とする事柄が同じでも、その事柄を自分のなかに取り込んでいくときに、一人ひとりの個性・人間性があらわれます。作文の題材とは、自分を通して、自分の生き方・考え方を通して取り込まれたものなのです。今回、特に看護系で自分を通した題材として素晴らしい作品が複数ありました。命に関わる事柄はインパクトが強いだけに、事柄を消化する自分の考え方・生き方が薄らいでしまうことや、感情表現の空回りが

見受けられることが多いのですが、事象を通して、自分自身の生き方を見つめた題材を活かした作文となつておりました。

次に表現力です。作文は、自分を通して取り込んだ題材を自分の言葉で表現します。事柄の説明・経験したものと書き表すのではなく、事柄を通して自己、すなわち自分自身を表現することであると言えます。さらに、表現には技術が必要です。言葉を選び構成を考え、読み手に正確に伝えなければなりません。優れた内容を有しながら、表現の技術不足により、「思い」の空回りとなつてしまつた作品が数点ありました。言語表現について、第三者の目線で自分の作文を読み返すことなどが大切です。

社会での生活にはコミュニケーションが不可欠です。そのコミュニケーションの多くを支えるのが「ことば」です。今回の選考でたくさんの「ことば」と出会いうことができ、また、多くの若者の歩んでいる道を感じることができました。選考という作業を通してこの出会いに、心から感謝いたします。そして、一人でも多くの方々の入賞作文との出会いを期待いたします。

作文コンクール表彰式



平成23年度 作文コンクール表彰式 中学校の部（12月19日） 東京都産業教育振興会

平成23年度 作文コンクール表彰式 高等学校・専修学校の部（12月19日） 東京都産業教育振興会



中学校の部 最優秀賞

中学校の部 最優秀賞

「ブドウ畑からの贈り物」

東京都立白鷗高校附属中学校 三年

小林まりあ

さんさんというよりはかんかんと照りつける太陽の下、私たちは、辺り一面に広がる広いブドウ畑にいました。昨年七月、新潟県農村宿泊体験でお手伝いさせていただくことになりました、農家の方のブドウ畑です。一泊二日お世話になつたそこでは、ブドウ畑のブドウに、白い袋状になつた紙をかけていく作業を任せられました。カゴ一杯になるまでこんもりと重ねられた紙袋が、こんなにやらなくてはならないのかと、私の気持ちを重くしました。実は私は、せっかくここまで来たのに、働かされるなんて面倒だなあ、と、それまであまり乗り気ではなかつたのです。長袖長ズボンを着て、帽子をかぶり、紙袋の入つたかごが一人ひとりに渡されたあと、作業に関する説明をしていただきました。

「まず袋の口を開いて、ブドウの実を落とさないよう、そつと下から覆つていくんだ。茎のところで、この針金を使って留めるんだよ。」

おじさんは、日に焼けた顔で、にこにこしながらそう言いました。でも、そもそも私には、この紙袋がなんのためにかけられているのか全く分かりませんでした。お店に並んでいる

ブドウには、そんな紙袋はかかっていなかつたからです。そんな私たちの疑問を感じ取つたのか、おじさんは、「ここ最近は、この辺りでもハクビシンが出るようなんだ。ブドウは、ハクビシンだけではなく鳥たちにも狙われる。こも、それにそこも食い荒らされた跡はみんな鳥たちの仕業だ。そんな風にブドウを狙つている動物たちや、雨や風からブドウを守る。その紙袋には、そういう役割があるんだよ。」

と言いました。考えてみれば、お店に並んでいるブドウは、みんなきれいでぴかぴかしています。それは、この紙袋がブドウを守つていたからだつたのです。そう思うと、今度は一転、がぜんやる気が湧いてきました。

「この作業って、全部手作業でやるしかなんですか？」一緒に説明を受けていた友達がそう尋ねると、おじさんはちょっと得意そうな顔でうなずきました。

「もちろん、手作業だよ。毎年大変でね。こうして手伝つてもらえると、随分助かるんだ。」

それを聞いて、私は事前学習のときに調べたことを思い出しました。お店で一般的に売つている種のないブドウは、手作業で作られるのだそうです。まだ若いブドウを一房一房、葉を満たしたコップの中につけていく作業です。こんなにたくさんあるブドウに対して、そんな手作業を何度もしなくてはならないのかと、農業の大変さに改めて驚かされました。いいよ、私たちの作業が始まりました。ぎらぎら輝く太陽の下、同じ作業をずっと続けていきます。最初のうちは友達と和やかにおしゃべりをしながら続けていた作業ですが、作業に没頭していくうち、皆黙々と、それでいて最初よりできぱ

きと進める事ができるようになりました。それでも暑い中の作業はかなり辛く、汗がだらだら流れ落ちました。時は、ブドウのつるの隙間にあるセミの抜け殻に出会い、ぎょっとさせられることもありました。長袖を着ていてるのに、腕にも蚊に刺されの痕があちこちにできてしまいました。そんな時、「もういやだ、こんな作業、やめてしまいたい。」と何度も思いました。でも、「自分がやらなくては、駄目になってしまうブドウがあるかもしれない。」という使命感に背中を押され、最後まで頑張ることができました。

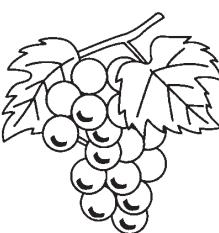
「こっち、一カゴ分終わったよ。」

「こっちも、こっちも。」

二日目にはそんな会話が日々交わされるようになり、何とか、東京へ帰る日までに作業を終えることができました。私たちが帰るとき、

おじさんは、

「よく働いてくれて、本当に助かっただ。これからも毎年来てほしいくらいだよ。」



と、すごく褒めてくださいました。

東京に帰つてからも、農家に泊めていただいた二日間のことはずつと忘れられず、大変な作業をしつかりやり遂げることができたという満足感でいっぱいでした。その反面、それだけ大変な思いをした作業が、農作業全てのほんの一部分に過ぎず、それをおじさんとおばさんの二人で切りもりしているということに危惧も覚えました。東京に帰つてきたあとの事後学習で学んだことですが、日本では、年々、農作業に取り組む人の数が減っているそうです。また、日本は先進国の中

でも一番食糧自給率が低く、「食」に関する危機感が、国内でも高まっているとのことでした。それを聞いて、こうして私たちが、働くことの喜びと達成感を知ること。農作業に対する、そして「食」に対する興味と関心を持ち、正しい知識を身につけること。日本の「食」を取り巻く現状を知ること。それらが、この農村体験の目的だったのだと実感させられました。働くこと、そして、何かを育て、つくることの大変さと喜びを学ぶことが出来た、本当に貴重な体験でした。それから二ヶ月後、私たちの元に、一箱のダンボールが届けられました。送り主の住所は新潟。箱を開けると、ふわっと甘い香りが広がりました。私たちがかけた、あの白い袋に包まれたブドウは、今まで食べたどんなブドウより甘く、美しく感じられました。

あの農村体験から一年が経ちました。私はあのときの喜び

が忘れられず、ベランダで小さな家庭菜園をしています。ものをつくること、働くことを、楽しいと思える、そんな

大人になれるよう」という気持ちを込めて、毎日水やりを続けています。



中学校の部 最優秀賞の小林まりあさん

中学校の部 優秀賞

働くということ

北区立十条富士見中学校 三年

小島 謙子

総合的な学習の時間の一つとして、「職場体験」がありました。私は、自分が卒業した幼稚園で五日間にわたり活動しました。幼稚園の先生や学校の先生というのは、とても大変な仕事だと思います。なぜなら、安全を守りつつ、子どもたちに様々な事を教えなければならないからです。そして、個々に違う特徴をもつ子どもたちを一度に相手にするという点も、大変だと思います。また、他の仕事とも大きく異なります。生産した物を売ったり、娯楽施設を提供したりする場合と違い、幼稚園の先生や、学校の先生たちは、教育という目には見えない、しかし欠かせないものを人に教えることを仕事としています。「からだと心を育てる。」これも一種の産業なのだと思います。

二つ目は、「働く中で自分を高める」ということです。子どもたちは日々、心も体もぐんぐん成長していきます。ですので、昨日と同じ様に接することはできないのです。なので、自分自身も成長しなければなりません。そうすることで、よりよい仕事ができるのだと思いました。

三つ目は、「産業が社会を支えている」ということです。世の中には、多種多様の職業があります。それらは別個のようになりますが、実は一体なのだということがわかりました。幼稚園の中では、先生だけでなく、バスのドライバーや給食会社の方などを見かけました。一つの職業の中でも、他の職種と連携して仕事を行っているということがわかりました。このような産業の密接なかかわり合いが、社会をうごかしているのだと思います。

そのような仕事を、五日間体験してたくさん仕事を学びました。一つは、「全体の中の個を大切にする」ということです。社会の基礎となる集団行動をやしなうカリキュラムが多々あります。ですが、仕事をして子どもと接しているため、全員同じように対応しなければいけないのでしょうか?と思いつたのです。

方にお話しをうかがつたところ、次の感銘をうける言葉をいただきました。

「保育や教育とは、体や心を育てたり、成果を上げたりする事だけではありません。私たちの仕事は、これから何十年と生きていく子どもたちの人生が素晴らしいものになるように、そしてこの園で過ごした三年間がその子の一生の糧となるよう努めることです。私たちの仕事は、一人ひとりをじつくり見て、助けることでも、支えになることもできるのです。」この言葉を聞いて、「働くこと」は社会の中でも重要な事なのだとと思いました。

どもは、少なくないはずです。私は、五日間の仕事を体験して、働くということは、責任をもつて役割を果たさなければならぬのだと思いました。また、憧れだけでは仕事が出来ないという事を感じました。社会が円滑に機能するためには、各々の産業が役割を果たさなくてはなりません。そうなると、働く個々にも高いスキルが要求されます。そのスキルをやしながら事ができる最大の機会は、学生時代だと思います。級友の中にも「就きたい仕事があるから。」と言い、進学先を決めている人も多いです。学生時代というのは、短いですが、生きていく基礎を築く時です。この時にどのようにすごすかで、生きる道が大きく変わると思います。いうなれば、将来の可能性をひろげる事ができる時なのです。だからこそ、貴重なのです。夢はどんな人でもいだく事ができますが、実現する事は努力を重ねて自らを高める事ができた人だけです。理想の仕事に就く事は難しい事だと思いますが、産業の担い手となり、社会を動かす一員となれる五年、十年先を考えると、仕事に対する思いが広がり、大きくなりました。

私は、今回の職場体験で学び、わかつたことは、幼稚園で働くということは、子どもを育てるというとてもすばらしい仕事であることです。私は、学校にもどつてから多くの級友たちが体験した職業の内容を聞きました。その結果、色々な仕事があり、どの職業も立派で大切な仕事であることがわかりました。

そして、今わたしがしなくてはならない事に気付きました。

それは、皆が職業に就く準備期間である中学校生活を大切にすること。

私は、将来の仕事については、まだ明確には決まっていませんが、どのような仕事にしろ、社会の人々に奉仕できる職業に就きたいと考えています。

働くということ

東京都立白鷗高校附属中学校 三年

林 日向子

私の父は塗装会社を営んでいます。と言つても小さなものです、父と一緒に仕事をしているのも、殆どが親戚の人たちです。私がまだ幼かった頃は、仕事というものはよく分かりませんでしたが、成長するにつれ段々と、その大変さが分かってきました。腕のところどころにペンキを付けて帰つて来て、すぐお風呂に直行する父の姿を見ると、いつも大変そうだな、と思うことがあります。今年の夏、父は真夏日に、建物の屋根の塗装を行いました。私はそれを聞いて心配したのですが、父本人は「危うく熱中症になるところだつたよ」と言って笑っていました。

私は、今振り返ると、どうしてあの時父は笑つていられたのだろうと思います。そして、働くって、どういう事なのだろうと考え始めたのです。

私は今中学三年生です。二年生の時、私たちの学校では職場体験が行われ、私は、希望していた明治大学博物館へ行け

る事になりました。私は子供の頃から博物館が好きで、よく上野の国立科学博物館や国立博物館に行つては、科学、芸術、歴史、様々な展示物に心を躍らせました。そのため、職場のリストを貰つた時、すぐに明治大学博物館にしようと決めたのです。一緒に働くメンバーも仲の良い友達だったのでその点は心配はなかったのですが、「博物館の仕事」というもののイメージが掴めず、不安がありました。

そして体験当日。体験は三日間あつたのですが、その主な内容は、展示品の手入れや受付、開館前と開館後の準備と片付け等でした。展示品の手入れでは、一般のある職人さんに寄付していただいた瓦を一つ一つていねいに洗つたり、円形埴輪の復元を行いました。どれも非常に地道な作業で、学芸員の方々はいつもこんな地道で大変な作業を行つているんだ、と感じました。

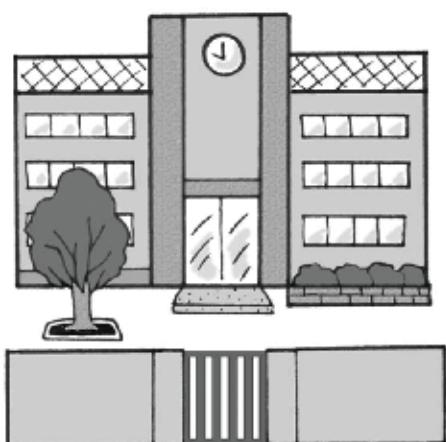
学芸員の方々の努力を特に強く感じる出来事がありました。それは、学芸員志望の、明治大学の学生の方々が行う、展示の説明のテストを見学させていただいた時のことです。テストの試験官をやられていた博物館長は、説明の内容だけでなく、その順番、ピントでのさし方など細かな部分までご指導し、立ち会つていた、いつも優しくフレンドリーに接して下さった学芸員の方も真剣な表情でそれを見つめていました。博物館でのあの分かりやすい説明は、小さなところまで気を払う、学芸員の方々の努力のたまものなのだなと驚きました。これまでの内容から分かるように、私が職場体験で学んだことは、「働く」ということは、多くの小さな努力を積み重ねることで、やっと『本物』になるということです。

私の住んでる街には小さな町工場がいくつもありますが、どこも長年の経験と努力から生まれた素晴らしい技術を誇っています。これらの方々のような職人達、学者、芸術家、テレビで見るタレントやスポーツ選手、政治家、そして学校の先生など、どの職業も、極めた人は皆気の遠くなるような小さな努力を重ねているのだと思います。それは、主婦とか、どんな『仕事』をする人にも言えることです。

そう思うようになつた今、私は父への見方が変わりました。腕や服に付いたペンキの汚れも、大変だと思うだけでなく、父が今日も頑張って仕事をしてきたという勲章のように思えるようになりました。

私も、成長して仕事をするようになつたら、小さな努力をおろそかにせず、そして誰かのために「働く」ことができるようになりたいと思いました。

この気持ちを忘れず、自分の進路をじっくり、そしてしっかりと考えていきたいです。



信 賴 の 輪

東京都立大泉高校附属中学校 二年

中 澤 萌

職業。職業を決めるることは人生で最も大きな決断をする時

である。学者やサラリーマン、スポーツ選手や宇宙飛行士……。この地球には実に何百個、何千個という職がある。その沢山ある職業の中から私達は、たった一つだけ、一つだけの職を手にすることになる。仕事なんて、そう簡単なものではない。一つのミスで人の命を危険にさらしたり、大切な取り引きを白紙にしてしまうこともある。責任重大なのだ。私は正直、仕事はしたくない。そんな責任に耐えられないと思うからだ。しかし、そんな甘いことは言つていられない。もうすぐ親元を離れてしつかり一人立ちしなければいけない歳なんだ。

こんな私にも夢がある。医師になることだ。医師こそ、人の命を預かるという責任重大な職業だ。考えるだけで恐怖を感じる。でも、私は「医師になりたい」そう思う。

平成二十一年、十月四日。私の父がこの世を去った。原因は肺ガン。まだ五十二歳だった。父が患った「小細胞ガン」というのは、四種類あるガンの中で一番治りにくい病気だったそうだ。体中のあらゆるところにガンが転移していく、もう手遅れと診断された。母は、担当医の井藝先生から「もつて、後、三ヶ月です。」

と余命宣告を受けていた。当時、小学六年生だった私はそのことを母から聞かされた時、頭が真っ白になった。「父がもうすぐ死ぬ。」そんな現実、受け止められる訳がなかつたのだ。母と相談して、この事は父に秘密にしようとしたが、母と私は病院通りの日々が続いた。看護をしたり、ご飯を食べさせたりして予想以上に辛い日が続いた。

そんなある日、私が学校帰りに病院へ行くと、母と井藝さんが休憩室で何やら話をしているのがガラス越しに見えた。母が戻つて来て、何の話をしていたのかを尋ねてみると、返つて来た答えは意外なものだつた。

「最初は井藝先生に相談に乗つてもらつていたんだけど、その後、昔流行したサザンオールスターの桑田さんの話で盛り上がつちやつてさ。久しぶりに楽しく喋れたわ。」

どうりで母と井藝さんは笑っていたんだなと納得した。母が笑つてているところなんて久しぶりに見た。本当は私が母のサポートをしてあげなくてはいけなかつたのに。私は後悔と共に井藝先生への憧れの気持ちが生まれてきた。患者の家族のケアまで出来るなんて相当気を配つて仕事をなさつてているのだと思つた。

それから私は、井藝先生の觀察をするようになつた。すると私は、井藝先生の言葉遣いに気が付いた。井藝先生は私の父に「私達も最善を尽くします。ですから中澤さんも諦めずに病気と向き合つて下さい。中澤さんなら必ずできますよ。」と、よく声を掛けてくださつていた。父も、「頑張ります。い

つもありがとうございます。」と返事をしていた。このように、井藝先生は患者の心に沿って、家族の心に沿って言葉を選んで話していたのだ。とても偉大な医師だと思った。

そしてその頃、私の小学校では運動会の練習が始まっていた。私は選抜リレーの選手に選ばれ、小学校生活最後の運動会とあって、とても気合いが入っていた。リレーの選手になつたことを真っ先に父に伝えるともの凄く喜んしてくれた。

しかし、運動会の前々日の十月二日。真夜中に病院から、父が危篤状態であるとの知らせを受けた。母と二人で直ぐ様病院に向かうと、父は意識が朦朧としていて、喋れる状態ではなかつた。抗がん剤治療を始めて二日目の夜だつた。

それから二日後の十月四日。父は眠りにつくようにしてこの世を去つた。私は父がいなくなつたショックと、リレーに出ていたる姿を見せられなかつた悔しさで胸がいっぱいになり、張り裂けそうだった。涙が滝のように流れてきて、自分では止めることができなかつた。その時、私はとても温かいぬくもりに包まれた。井藝先生が抱き締めてくれたのだ。

「辛い時は思いつ切り泣きなさい。大丈夫。」

その井藝先生の一言は私の涙腺をさらに緩めた。井藝先生のその言葉は今でも心の中で響いている。

私は今でも時々、井藝先生のところへ遊びに行つてゐる。医師になりたいということを伝えた。いつかは井藝先生と一緒に働きたいと思つてゐる。

私の将来の夢は医者だ。様々な人から信頼されて、気配りがしつかりできるようなそんな医者になりたい。自分を信じて、焦らず、正直な医者になりたい。一人でも多くの人を助

けたい。これが私の夢。

でも、医師という仕事は一人でできるものではない。看護師の人や多くの人のつながりも必要とされるであろう。信頼関係を築くのはとても大変だと思う。だから私はまず、人を信じることから始めていこうと思う。

井藝先生に出逢えて、本当に良かつた。

お父さんへ。

天国で私の活躍、ちゃんと見ててね。立派なお医者さんになつて、お父さんみたいな人をちゃんと治すから……。



中学校の部 優秀賞の皆さん

中学校の部 佳作

私 の 夢

愛 国 中 学 校 三年
土 田 桂 子

私の夢は小児科の看護師になることです。小児科の看護師になろうと思つたきっかけは五歳の時に、発病したI型糖尿病でした。発病してすぐに一ヶ月間入院しました。入院している時は食事制限と、食前三十分前の注射治療を毎日しています。食べたいものが食べられなくて辛かったことを覚えていました。そのうえ消灯後は、母とは一緒にいられなかつたので淋しくなり毎晩泣いていました。そんな時いつも寝るまで一緒にいてくれたのは私の夢でもある看護師さんでした。淋しがり屋で泣き虫だった、私の心を慰めてくれたのも看護師さんでした。他にも、遊んでくれたり、お話しをしてくれたりと楽しい入院生活を看護師さんのお陰で過ごす事ができたのです。そんな看護師さんに憧れ、看護師になることが夢になりました。

それからも、沢山の看護師さんにお世話になりその度に「看護師になりたい」という気持ちが強まりました。それと同時に『小児科の看護師』になり、幼い子供たちの支えになれるなら嬉しいと思うようになりました。それまでは、幼稚園の先生になりたいと思っていました。なぜなら小さい子が好きだつ

たからです。だから、看護師になるのなら『小児科の看護師』になろうと思っているのです。ところが、私のお世話になつてゐる主治医の先生に

「土田さんは小さい時から糖尿病と関わつてきてるから、もし看護師になるんだとしたら糖尿病の専門看護師になつたらどうかな。」と先生に提案されました。そこで『専門看護師』になるか、『小児科の看護師』になるか迷つています。が看護師になりたいという気持ちは変わつていません。専門看護師は、糖尿病やガンなど色々な種類があります。しかし、その資格を取るためにには看護師の資格はもちろん、なりたい専門の知識と経験が必要です。何年間かの臨床経験を経て、試験にパスしなければなりません。沢山の条件をクリアしないと試験を受ける事もできないのです。色々調べたり、考えたりしていくうちに一つだけ思いついた事があります。それは、小児科の看護師としてまず一所懸命働き、沢山の経験をつんでもから糖尿病の専門看護師にならうそう思つたのです。

しかし、夢を叶えるためにはまず看護師の資格を取らなくてはいけません。私の今通つている中学校は高校に衛生看護科があるのでその衛生看護科に進もうと考えています。看護師になつた際患者様ときちんと向き合いながらケアすることは重要なことです。常に優しい気持ちを持って接していくなければなりません。そのためには、人間性が豊かでなければなりません。そして患者様を包み込む大きな心が必要です。患者様支えるには専門知識はもちろんのこと、体力も精神力も強くなければ看護師にはなれません。これからは今までよりもっと心強い志を持つて勉学を励みたいと思います。

『小児科の看護師』といつても色々な人がいます。例えば、

怒りっぽい看護師さんだつたり、優しい看護師さんだつたり、

看護師さんだからといってみんな同じとはいません。色々

な看護師さんがいるなかで私は「優しく時には厳しく病気だけ

でなく心のお世話もできる。」そんな看護師になりたいと思つ

ています。そのためには、今から気をつけていかないといけない事がいくつもあります。一つ目は「周りの人に常に優しく接する」二つ目「人の話をしつかりと聞く」この二つはあたり前のことかもしれません。しかしそんなあたり前のことが今私の完璧にできるとは言えないのです。完璧にするには、自分の体調管理を完璧にする事から始めていこうと思います。

看護師になつたら、他の看護師さんよりは入院をしている患者様の気持ちを分かれる事ができると思います。そのため、患者様の良き相談相手になれたり、勇気づける事ができたりと、患者様の心のケアを少しだけでもできると思います。どんなに壁にぶつかっても、乗り越えられる強い心を持つて『看護師』という夢に向かって努力していきたいと思ひます。



夢に向かつて

愛国中学校三年
山口春花

私の将来の夢は保育士になる事です。私は幼い頃から小さい子の世話をするのが好きでした。小さい頃は「お姉ちゃん」と呼ばれる事を嬉しく思つていました。

私が小学生の頃、親戚の子どもがよく遊びに来ました。私も小さく遊んでいました。母には「面倒見がいいから保育士に向いてるよ」といわれました。その時は単純に嬉しく思い保育士になろうと思つていました。しかし、小さい子が階段と一緒に降りている時に、足を踏み外し転んでしまいました。小さい子は泣いてしました。私がちゃんと注意していればこんなことにはならなかつたのかなと責任を感じました。その時、保育士は簡単なものではないと分かりました。

私の知り合いは保育士をしています。保育士になるのには色々な資格を取らなければならないと言つっていました。資格を取る為には沢山の努力が必要です。私はその中でも一番大変なことは何か聞いてみました。すると思つてなかつた答えが返つてきました。それは相手の親との関わりだそうです。園児が怪我をしたときなどの責任はすべて先生にあると言う事です。とにかく子どもが好きなだけでは出来ない仕事だと言つしていました。私は大変な仕事だなど改めて思いました。

中学に入学し、保育専門学校がある事を知りました。私はどういった所なのか気になつたので愛国新聞にある保専版を読みました。保育士は小さい子と遊ぶことだけが仕事ではないと書いてありました。私は小さい子と毎日楽しく遊ぶことが保育士の仕事だと思っていました。しかし現実は違っていました。保育士は子どもの安全を第一に考えなければならぬのです。子供が使ったものはアルコールで拭く事や、ピアノを弾けなければならぬなど必要な事が書かれていました。その中でもピアノが大変だと書かれていました。私はピアノが苦手です。もしピアノが弾けなかつたら保育士にはなれないのか不安に思いました。しかし、この人は私と同じように戸籍が苦手だったそうです。そこには、上手に出来る事よりも下手でもいいから一生懸命に弾こうとしているのか、が重要だと書かれていました。人には得意なものや不得意なものが必ずあります。何事にも一生懸命になる事が大切なのだと分かりました。

私は、小さい子のお世話をしている時に、その子が悪いことをしても叱る事ができませんでした。小さい子なのだから仕方がないと思っていたからです。ある日、母とショッピングをしに出かけた時でした。お店の中では誰の子供か分からぬ子が走り回っていました。その時私は心の中で危ないなと思いました。しかし、私の母は迷わず小さい子に向かって注意をしました。しかし、私の母は迷わず小さい子に向かって注意をしました。どうして他人の子供に注意したのかと聞くと「小さい子だからってしていい事と悪い事があるの。他人の子だからと言つて大人が注意をしないでどうするの。」と言つてい

ました。その言葉に私は感心しました。悪い事をした時は他の子供でもきちんと叱る事が大切なのです。保育士は、預かっている子供に悪い事はきちんと分かるように教育しているのだと思いました。

小学生の頃から保育士になりたいと思うようになりました。しかし、保育士は簡単になれるものではありません。努力をして、資格をとり、子供との接し方などの勉強も大切です。自分が保育園に通っていた時は、先生から叱られることが沢山ありました。なんで叱られたのか考え、悪い事と良い事の区別が出来るようになりました。その時の先生は子供の事を第一に考えていました。保育士と言う仕事は、子供たちの保護者のようなものです。子供を預かると言うのは、重大な責任を持たなければなりません。相手の親が信頼してくれているからこそ子供を預けるからです。私はそのような重大な責任を持つてるかどうか心配です。しかし子供は遊びが中心なので、毎日楽しいと思ってもらいたいなと思います。私も子供からそう思つてもらえるような先生を目指したいです。

まだ中学生なので社会の大変さや働く内容などは良く分かれません。保育士もとても大変な仕事だと思います。資格もない子が走り回っていました。そのためにも沢山の努力と経験を積み重ね学んでいきたいと思います。保育士になつてから頑張つてよかったですと思えるような立派な保育士になりました。

「家庭科部に入つて」

千代田区立神田一橋中学校 三年

前澤温子

私は家庭科部に入つて、良かつたと思つています。そして、自分にとつてすごくいい経験ができました。

私が家庭科部に入つて間もなく、中部国際空港に展示するキルト作品をつくる事になりました。キルト作品のテーマは星に決まり、制作にとりかかります。キルトは布をベースにして作つていくので、布をどういうふうに縫つていくかを皆で考え、長方形の小さな布を何度も重ねてベースをつくる作業が始まりました。私は、この作業が一番大変でした。そのうえ作業が夏休みの間だつたため、田舎に帰つても、縫う作業を続けました。夜も遅くまで作業をし、毎日大変だつたけど今ではいい思い出です。次は、その重ねて縫つた布をぬいあわせ、その布地の上に刺繡をしていきます。夏休みの終わいくことになつたのです。しかし、きれいに縫うのが大変で、私の場合縫い目を裏から見ると、すごく汚くなつていました。周りの皆は、きれいに縫えているのに、どうして私はきれいに縫えないんだろうと思つていました。そこで気づいたんです。自分は作業が大変だから



早く終わらせようと、不意に雑にやつていた所があつたんだと。それからは丁寧にやることを心がけて製作に励みました。刺繡が出来上がつたら、最後に仕上げとして、きらきらの粒をはつていきます。しつかり縫つたり、くつつけたりしないと、しばらく経つた時にとれてしまうので、きつちり付けました。そして完成!。出来上がつた時は、今まで味わつたことのない喜びが湧いてきました。空港に展示されるので、見に行ける人は行つてねと先生がチケットをくれました。遠かつたので見に行けなかつたけど、空港を利用している人が私たちの作った作品を見ててくれていると思うとすごく嬉しかったです。

私がこの経験から学んだのは、一度決めた事は貫き通すということ、皆で協力して何かを完成させることの二つです。自分がやると決めたことは中途半端にせず、自分の力でやり遂げようという心を持つことが、これから将来につながつていくと思います。

それから、一年経つた二年の頃、今度は校歌を刺繡することになりました。校歌の一音ずつを一人で刺繡するのですが、漢字は縫うのが難しいなあと思つっていました。部活の時間内に終わらないと、宿題にされるので、必死にやつたけど、結局家でやることになつてしまい、夜中の三時半まで頑張つて縫いました。今まではそんなに遅くまで起きていたことがなかったので辛かつたけど、家庭科部のためならと思いながらやりました。一方で、宿題が終わらないと、やはり先生に怒られたこともしばしばありました。誰かがやつてこないといつまでも作品が出来上がらない、その上、部が険悪なムード

になつていました。だから一人一人が、皆も頑張っているんだということを意識してやれるようになりました。完成した刺繡は額に入れられて、学校の体育館に飾られています。全校朝礼などで、生徒が校歌を歌うときに、自分たちが作った刺繡を見ながら歌つてくれることに喜びを感じると共に役に立つていて良かつたです。

そして、家庭科部に入つて三年目の今は、新たに日本キルト展に作品を出品しました。題名は「空のムコウヘ」です。デザインは一年生の時と同じ、星をテーマにした作品です。でも前回に比べてバージョンアップし、夜空に光る沢山の星座をキルトで表現しました。入賞はできなかつたものの、納得できる作品を作れて満足しています。

私がこの家庭科部で経験した事は、今後の自分の将来に生かせていくものばかりです。家庭科部に入つて一番良かったのは、自分自身の中に足りないものを見つけ出せたということです。何か足りないなあ、ここもつとやりこまないとないと作業している時にこんな事を思えるようになりました。

私はもうすぐ部活を引退しますが、今まで三年間家庭科部でお世話になった先生が、教えてくれたことを忘れず、もう一度初心に返つて何ごとも前向きにやつていこうと思います。

私はもともと不器用だし、飽きっぽいから、こんな大変な事この先続けていくかるかどうか分からなかつたけど、どんどんやつていくうちに集中力が高まって、勉強にもその成果は現れました。だから、何ごともコツコツ日々努力していく事は本当に大事なことなんだなあとつくづく感じています。

最後に私にとって家庭科部は、大切な事を教えてくれた、

最高の部です。今までお世話になつた顧問の先生と共に頑張つた仲間達に感謝の気持ちでいっぱいです。また何か辛いことがあつた時には部活で頑張つた事を思い出そうと思つています。

『震災で感じたものづくり』

中央区立晴海中学校 三年

山 田 達 也

2011年3月11日、東日本大震災が起きました。この地震では被災地の様子も前代未聞でしたが、被害が出なかつた地域でも買い占めにより防災用品や生活用品などが品薄になるということがありました。僕の家でも防災用品が不十分で、用意していた乾電池の使用期限が来ていたり、東日本大震災の被害の様子を見て、足りなかつたものを買い求めたり、いざという時の情報を集めたりしなければなりませんでした。

震災を通じてものづくりを考えさせられたことが2つあります。

1つ目は、2年の2学期から3学期にかけて学習、作成した、技術の課題作品が返却されたことです。

課題作品はソーラー エナジーという、太陽光と手回し発電によるラジオでした。ラジオを作るということ自体も初めてでしたが、中でも、基板に抵抗器やコンデンサを接着する「はんだづけ」は、注意が必要ながらも面白い作業でした。昨年

度には髪の毛を焦がしたり火傷をした生徒もいると聞いて、最初は怖くてなかなか進まなかつたものの、慣れてくると楽しくどんどん進みました。固いはんだが熱せられて溶け、固まっていく様子は生き物を見ているような気分です。通電の確認をする時は、自分の作った物が本当に動くのかドキドキしました。

数々の部品が合わさって、1つの作品になり、実際に動くおもしろさや、ここにある部品は1つの作品だけのものではなく、他のいろいろものの作成にも使うことを考えると、他の作品への夢もふくらみます。限られた技術の授業時間では、いろいろな作品を作ることができないのが残念です。

このラジオは、完璧に作ることができませんでした。悪い所がないか何回も確認したり、先生にも見ていただきたり、業者の方に修理にも出したのですが、どうしても携帯の充電だけができない状態です。一番といつても良いくらいの魅力である充電ができないのはとても悔しかつたです。でも、家族にとても喜ばれ、みんなの役に立つたことはとても嬉しく感じました。

2つ目は、被災地から届けられた避難所の様子のニュースです。

被災地では、震災によつて何もかもを失つてしまつた人がたくさんいました。避難所にも物資は少なく、電気や水も無い中での生活です。そのような中で、水道工事の技術者がブルから水を引いてくる装置を作つてトイレの水を確保したニュースがありました。自分の持つてゐる技術を使い、少ない資材をうまく活用しながら、みんなの生活を改善したのです。他

にも廃材を使った看板や、洗い物を少なくしたり配膳しやすい食器の工夫など、みんなの知恵を集めたものづくりがたくさんありました。

写真メーカーによる流された写真の修復作業もありました。一枚一枚を丁寧に洗い流して乾かす地道な作業が続けられていきました。今まで、何かを作り出すのがものづくりだと考えていましたが、形のあるものだけでなく、思い出という形のない物を作り出すのものづくりだと思いました。

被災地に届いた物資の中では、ダンボールシェルターというカッターだけで組み立てられるダンボールハウスがありました。これは今回の震災後に開発されました。避難所で暮らす人のプライバシーを守り、保温効果を高めるのにも、とても役立つたそうです。

震災で、被災地の方は多くの物を失いました。代わりに僕たちは、改善や発明のチャンスを得たようにも思います。物のあふれる現代社会では、物のない生活を想像するしかなく、想像では今回のような災害への備えは足りないからです。

また、原子力発電所への被害によつて、新しいエネルギーによる発電も考えられています。今回学習した太陽光発電もその1つです。実現までには、たくさんのアイデアと技術が必要になります。日本にはそれを支えているたくさんの研究者や技術者がいて、高い技術力をもつています。そして、それに続く人たちも、僕たちの中から出てくるはずです。

世界的にも歴史的にも大きかつた「東日本大震災」。僕の知らないところで、もつともとたくさんの人たちが技術を提供して、いろいろなものを生み出しているでしょう。辛い震

災の被害だけでなく、人に喜んでもらえるものづくりや、改善が生み出すものづくりがたくさんあったことを忘れずにいたいと思います。

私の将来の夢

墨田区立立花中学校 三年

番 場 有紀奈

私は、たくさんの夢がある。理容室の従業員、水泳のインストラクター、学校の先生数えきれないほどある。その中でも私は、看護師という職業を目標に勉強を頑張っている。私が看護師になろうと本気で思つたのは、中学二年生の冬。職場体験をしている時のこと。

私がナースステーションの主任さんにあいさつをしている時、それだけで、汗をかいたことを覚えている。きっと顔もガチガチだつただろう。働くということは、いくら体験でも、こんなにも緊張することなのであろうかと、その時思った。働いている看護師さんは堂々としていて真剣に患者さんと向き合つていてすごすぎて言葉が出なかつた。私もこんな風になれるのかなとか、色々な不安が頭をよぎつていた。そんな思いをよせながら、私の職場体験は始まつた。私の最初の仕事は患者さんにごはんを食べさせてあげること。のどにつまらせないように、患者さんのペースに合わせて、そして会話

もきちんと。このようなアドバイスを受けながら、最初の仕事を終えた。たつた四十分くらいの出来事だったが、とてもとても緊張した時間だつた。次は患者さんへの吸入。どうすればよいのかよく分からなかつたが、看護師さんが優しく教えてくれた。丁寧に分かりやすく。その時、私は思った。私もこんな優しくて仕事もテキパキこなす、そんな看護師になりたいと。この時は今までで一番そう思つた瞬間だつた。それから、私は色々な仕事をした。もちろん完璧にはこなせなかつたが、自分なりに頑張ることができた。そして職場体験も終わりに近づき、最後のあいさつの時は、最初のあいさつの時よりも緊張せずにできた。二日間で少しは自分に自信が持てた気がした。そして、自分の夢に一步、近づけた気がした。

私はこの職場体験でたくさんのことを得ることができた。まず一つ目は、何ごとも責任を持って仕事をすること。特に看護師は人の命を預かる職業だ。一つの失敗もあってはならない場所である。だから私は責任の重大さを忘れてはいけないということを学んだ。そして二つ目は人と人のコミュニケーションを大切にすること。これはどの職業に就いても必要なことである。一見、簡単そうに見えるが実は一番、難しいことなのではないかと思う。なぜなら、コミュニケーションとは、人と人とがつながりをもつことで、言葉や行動だけではなく、その場の雰囲気を作つたりどういう風に話したり、接したりすればよいかを考えること。人は一人一人、色々な面を持ち、一人一人性格もちがう。そして全員が全員、同じコミュニケーションをとれるとは限らない。だから、仕事の

中で一番難しいことはコミュニケーションだと思った。最後に三つ目。働いてくれている人に感謝すること。私は今回、働くことを体験してみて、ものすごく疲れた。たった一日間だけだったけど、とても大変だと実感した。けれども、私の両親は毎日働いている。それでも、家では私たちに疲れた顔を見せずに笑顔でいる。本当にすごいと思った。

私は今回の体験を通して仕事の技術だけでなく、大切なことを学んだ。仕事は、自分に自信を持たせ、責任感を得ることができる。そして人への感謝を改めて実感できるものだと思った。だから私は、将来の夢を実現できるように、今回体験したこと忘れずに頑張っていきたい。

「もうと早く拭けるようにしてよ。」
と、アドバイスをいただきました。次にお店の外掃除です。外には観葉植物が置いてあり葉が落ちているので、きれいになつていく実感があり、やり甲斐がありました。食べ物を扱うお店だからこそ余計、こうした毎日のきちんととしたお掃除が欠かせないのだということが良く分かりました。

掃除の後は、お菓子を入れる箱や袋作りです。出来ているものを使っていると思っていたので驚いていると店員さんは、「このお店は、箱も袋も手作りしているんだよ。この箱のように作っている途中で、ひびが入っちゃうことがあるの。気にならない店員さんも居るけど、私はきれいな箱をお客様にお渡したいから、あなたも気をつけて作ってね。」

と優しくアドバイスしていただきました。私はとても感動しました。私も自分の仕事には、こだわりを持ってやりたいと思つていたからです。気をつけながら箱作りをしていると、「おはようございます。」と、別の店員さんが入ってきました。こ

「職場体験で得たもの」

目黒区立第八中学校 三年
筧 田 有 理

三年生になつてすぐに、職場体験が行われました。電車を乗り継いで行く会社からご近所のお店まで、沢山の方々のご協力を得て、私たちは中学校で初めての職場体験をさせていたただけることになりました。

私が選んだ所は和菓子屋さんです。和菓子が大好きだったのですが、興味があつたからです。しかし接客などはあまり得意でなかつたので、体験日が近づくにつれ、ちゃんと出来るだ

ろうか、お店の人に迷惑をかけてしまうだけではないかと、不安な気持ちでいっぱいになつてしましました。

いよいよ体験当日。早目に行くとまだシャッターが閉まっていたので、どこから入つていいのかわからずまごまごしていました。すぐにお店の人が気付いてくれました。中で緊張しながら挨拶を交わし、すぐに仕事に取りかかりました。まず最初に、お店の出入り口のガラス拭きです。拭く前からとてもきれいだったので、どう拭けばよいのかわからないまま、全てのガラスを拭いていきました。そのせいか時間がかかりてしまい

の方はとても明るくてよくお話を下さる方でした。私は人と話をするのが大好きなので、三人で楽しく会話しながら箱や袋を作ることができました。そしてその時に仕事にはこういう人達が必要なのだと、つくづく感じました。こだわりを持つて仕事に取り組む人、職場を明るく楽しい気持ちにさせてくれる人。私もこんな風に必要とされる人になりたいと、この時強く思いました。

仕事は好きなことばかりではありません。次に任せられたのがお客様にお茶をお出しすることです。

「よろしかつたらお茶をどうぞ。」と、たつたそれだけのことなのですが、初めての方に自分から話しかけ、お茶をすすめるという事に声も手も震えてしましました。とても恥ずかしかつたですが、これも良い経験になりました。

苦手な仕事の後に一番楽しみにしていたラッピングの仕事を教えていただきました。何度も繰り返し練習させていただいたので、

「初めてにしては上手ね。」

「今まで体験に来た子ども達の中で一番上達が速いわね。とっても上手。」

「これ上手にできたから、このまま使っちゃいましょう。」

と最高の言葉を言つていただき、自分の作った物が売り物になるという、仕事での初めての喜びを感じることができました。

家に帰つたら自慢しようと思うくらい



とても嬉しかったです。

皆様のお陰で、楽しくやり甲斐のある仕事をさせていただきました。その日はとても忙しく、猫の手も貸りたいくらいでした。また、ラッピングを希望されるお客様が多く、二人では間に合わないので私にも、「これよろしくね。」

とラッピングを任されることになりました。一瞬どうしようとなめらいましたが、そんなことを言つている場合でなく、私は必死に仕上げていきました。それを見ていた店員さんが、「これもよろしくね。」

と頼まれました。私は自分の仕事が認められたような気がして嬉しく、無我夢中でラッピングをしていました。しばらくしてお客様もいなくなり、ホッとすると同時に私がやつたラッピングで大丈夫だったのかなあと、不安になつてきました。その時、

「あなたすごいじゃない。」

「私、この子やれると思って、沢山ラッピング任せちゃつたわ。」

「お客様に店員に間違えられていたものね。すごいわ。」

と、今までに無いくらい褒めていただき、それだけで職場体験に来て良かったと、熱いものが込み上げてきました。三日間があつという間に過ぎ、来るまでは不安でいっぱいだったのに、今ではもっと働きたいと思っている自分にびっくりしました。

たつたの三日間でしたが、こんな貴重な体験をさせていた

だけたことに、ご協力いただいた皆様や、機会を与えて下さった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

今はお客様として、お世話になつた和菓子屋さんに時々行っています。その度に皆さんが、たくさん話しかけ温かく迎えて下さいます。職場体験を通して、仕事をするという喜びと、それ以上に、人と人とのつながりという大切なことを得ることがきました。

かつお節ロード

大田区立南六郷中学校 二年

中 西 愛 美

二〇一一年、夏。木工室にいた私のまわりは、かんなで作られた「かつお節」でいっぱいになつていた。

一年前の春に私は中学校へ入学した。中学校生活で一番楽しみにしていたことは部活だった。

私は小学校で、「金管バンド」をやつていたので、「吹奏楽部」に入ろうと思つていた。しかし、活動日と自分の予定が合わないことが分かり、第二希望の「ものづくり部」に入部することにした。

ものづくり部とは、その名の通り、ものづくりをする部で、主に木工と金工をやつている。使う道具も本格的だ。私は入部してから多くのことを学んだ。それと同時に、目に見えない壁にぶつかることもあつた。特に「かんな」を使い始めたときは一言で言い表せないくらい四苦八苦していた。かんなとは、テレビで職人さんが使つているように木材の表面を滑らかに仕上げるための道具である。私がかんなを使い始めたのは一年前の夏休み。先生がかんなの使い方を教えてくれた。先生が木材をかんなで削つてているのを見たとき、私はかんなから出てくる「削り節」が「かつお節」にみえた。豆腐にかけて「冷奴」にすれば、私のお父さんはきっと、食べてしまうだろう。私は「自分もかんな削り（かんなで木材を削る作業）ができるようになりたい。そして、誰もが食べたくなるようなかつお節（削り節）を作つてみたい。」と思つた。

どうとう、自分もかんなに挑戦することになつた。まず、刃の出具合を調整した。かなづちでかんな身（先端が木材の表面を削る刃先になつっている部分）の頭を軽くたたき、刃先がほんのわずか台裏（かんな身の先端が出ている方の木の部分）から出るようにはめなければならないのだが、これがとても難しい。強くたたくと、刃が出すぎてしまう。逆に、台頭（たたくと、刃を引っ込めることができる部分）をたたいて刃を引っ込めると、やりすぎてしまう。そんなことの繰り返しだつたので、いつまでたつても調整できなかつた。その日は結局、先生に調整してもらい、かんな削りに入つた。削り台（木材を動かないよう固定する台）に木材を固定し、かんなは工作台をすべらせながら、まっすぐ、いつきに引く。実際にやつてみると、ちょっとした手のぶれで、削つた面がガタガタしてしまい、つるつるした面を出すことができない。私はできないことにくやしさを感じた。

その日から、私はかんな削りをできるようにするためにたくさん練習をした。最初は思うようなかんな削りができるなかつたけれど、少しづつ、できるようになってきた。でも、かつお節を作れるようになるまでには時間がかかりそうだ。

そんなある日、先生から「大田区のものづくり競技会に参加してみないか?」と言われた。ものづくり競技会とは、大田区の中学生が事前に配布された木材で約三時間四〇分の自由制作を行い、その技術を競い合う大会だそうだ。一月に開催されるので後四か月くらいしかない。私は「道具さえ、使いこなすことができない自分が大会に出場して大丈夫なのだろうか?」と思ったが、「今の自分には結果より挑戦することが大事なのでは。」と思い、大会に出場することを決めた。四か月は準備などであつというまにすぎ、とうとう大会当日になってしまった。いろいろと不安もあつたけれど、最後まであきらめずに作品を完成させようと思った。

競技開始の時刻になった。まず、両刃のこぎりで木材を切断する作業に入った。しかし、三〇分経過した直後から腕が重くなり、動きが鈍くなってきた。三時間四〇分中、三〇分しか経っていないのに、もう、疲れてしまっている。「これでは作品を完成させることができない!」と、危機感を感じた。でも、「やるしかない。」と思い、必死に手を動かした。一応、制限時間内に作品を完成させることができた。でも、途中から先生方に手伝ってもらうことになってしまった。私は一人で完成させることのできなかつた自分の作品を見ると、悔しくなった。手伝っていたいた先生からすれば、こんなことを思う私はわがままのかもしれない。でも、「これが私の実

力なのだ。」と思うと、たまらなく悔しかった。

大会から半年後の夏。私のかんな削りの腕は大会の時よりもなり、「かつお節」がたくさん作れるようになつた。今、一番うれしいことは、道具の使い方を後輩に教えてあげられるようになったことである。一年前は自分が教えてもらいう側だった。なので、教えてあげる側になつた今は夢のように思えた。

これから目標は、「自分一人で作品を完成させること」だ。そして、もっと、かんなの練習をして、本物よりおいしそうな「かつお節」を作りたい。私は今、新たなスタート地点からゴールを目指して、走り続けている。



ボランティアと社会

北区立十条富士見中学校 三年

鈴木紫央里

私は今年の夏休みに、ボランティア活動に参加しました。その理由は、私自身がアロマを好んでいることとお年寄りの方達と交流したかったからです。というのも、そのボランティアの内容は、アロマオイルを使用した手浴やハンドマッサージなどをデイサービスに通っている方達に体験してもらう、というものだったのです。ボランティアに参加したのは私と高校生の二人でした。

「中学三年生の鈴木紫央里です。……えっとすごく緊張しているんですけど、今日はよろしくお願ひします。」
というようなものになってしまいました。私は緊張に弱いので、そのときは頭が真っ白でした。

あいさつのあとは、いよいよ体験に入りました。私たち二人は二種類のハーブを「どうですか、香りはしますか?」などと言いながら持つて回りました。事前の打ち合わせの際に、私が、何を話せばいいのかわからないと言つたとき、そのボランティア団体の代表である堀口さんが、

「小さなことでいいのよ。『この香りどうですか?』とか『香りしますか?』っていう感じで。」
と言つてくれました。それを聞いた私は、早速、お年寄りの

方との会話のきっかけに堀口さんの言つていた言葉を使ってみました。すると、相手の方も反応をしやすいようで、みんなから言葉を返してもらうことができました。私はそのことが嬉しくて、それをきっかけに自分から会話のきっかけを作つて話すようになつていきました。また、私は常に笑顔でいることを心がけていました。笑顔でいるほうが会話もしやすいと思いましたし、私の心も広く明るくなれるからです。ですが、わざわざ心がけなくても笑顔は話をしているうちに自然に出てきました。ですから、お互いにハンドマッサージをする場面など、緊張感は少しありましたが、とても楽しく交流することができました。

そして、全ての体験が終わつた後、私はとても良い経験をしたと思いました。今回のボランティアは私にとつては二度目でしたが、以前、体験した幼稚園のお祭りを手伝つたときのボランティアとはまた違つたことを学ぶことができました。ボランティアは社会に出る前段階の私たちにでもできることで、社会体験そのものだと思うのです。ボランティアは内容が様々で、厳しい年齢制限はほとんど無く個人への条件もあまりありません。ですから、私はボランティアはその人のものに対する見方や知識、関心を高め、その体験は生きていく上で大切なものの一つになると思つています。

私は、生活保護を受けている人が増加していることについての特集番組をつい最近テレビで見ていて、「働けるのに働かない」人達を見て心に怒りを感じていました。一生懸命に働いて稼いだお金をなんとかやりくりして生活している人もいるというのに、その人達よりも高いお金を国民の税金から

もらつていて、なおかつ当然だとでもいうように職を探すこともなく暮らしている人達もいるのです。ある市ではそういう人達に働いてもらおうと職を見つけて支援しているようですが、一年以上、職を離れている人やあまり社会復帰に積極的ではない人にはボランティアを勧めるというのも一つの手だと思います。ボランティアなら短い期間のものが多いので、いろいろな業種をたくさん体験することができます。その中で仕事に対する責任感や職場の雰囲気を肌で感じることができたり、自分に向いている職業を見つけられるかもしれません。

このように、ボランティアは未成年・社会人を問わずに参加でき、発見が多いです。ぜひ、皆さんも参加してみてはいかがでしょう。

未来のために — 貴重な三ヶ月 —

練馬区立大泉北中学校 二年 鈴木優花

私は二年生になってから初めての総合学習で、職場体験を行うことになった。実際に職場で活動を行うまでの約三ヶ月間は、普段の授業からでは学ぶことのできない沢山の事を学べたと思う。

まず一つ目に「自分自身」だ。事前学習で私は、「自分自身」で調べた事のある職業や「自分自身」の長所・短所を考えた。この事は毎日を『何となく過ぎていくもの』と思い、自分で自分を見つめ直す事のない私には、とても深い勉強になつた。

二つ目に「人との会話方法」だ。職場の方への受け入れの依頼を自分自身が「電話」でするという作業は、普段ほとんど連絡などをメールで済ませてしまつている私には、とても難しかつた。だが、顔の見えない相手と『声』でコミュニケーションをとるという貴重な体験が出来たので、良かつたと思う。

三つ目に「相手へのインタビュー方法」だ。『インタビュー』という行動はもともと、日常生活の中であまり行う事のない行動で、私自身は自分から人に話しかける事もほとんど無いので、「自分から相手に質問する（話しかける）」という点で、とても貴重な体験になつた。

四つ目に「丁寧と早さのバランス」だ。これは職場体験当



日、体験先の手芸用品店で一番最初に任せられた仕事から学んだ。私が任せられたのは「棚に並んだ布の整理」という簡単な作業だった。しかし一つ一つに時間をかけすぎてしまい、最後までやり遂げる事ができなかつた。なので二日目に同じ作業を任せられた時、しっかりとバランスを考え効率よく作業しようと努力した。結果、約半分の時間で終わり、残りの時間で他の作業が出来たので、前日よりも沢山の仕事をする事ができた。

五つ目に「相手の事を考える力の大切さ」だ。私は体験一日目・二日目共に「布の整理」という仕事を任せられた。二日目は短時間で終える事ができたが、その間にも布を手に取つて見るお客様がいた。もちろん店員がいても、その横で普通に商品を見るお客様もいるが、中には店員が近くで作業をしていると商品の売り場を少し覗いただけで、商品選びを諦めてしまう方もいた。そんな時、同じ作業をしていた店員さんは、お客様が見ていた棚の作業を後回しにして、ゆっくりと商品を選んでもらえるように気を配つていた。その行動から、私は仕事に集中しながらも常に周りを気にするのは、あらゆる場面で必要な事だと気付き、相手の事を考える力の大切さを学ぶ事ができた。

六つ目に「笑顔の大切さ」だ。今回の職場体験で任せられた仕事の中に直接お客様とお話しする仕事は無かつたが、商品の整理などをしている間にも、お客様に質問される事が何回かあつた。最初、緊張気味だった私は上手く答えずについた。しかし他の場所で作業している店員さんの笑顔を見て「自分も、このままではいけない」と思つた。体験とはいえ何の知

識も経験もない中学生の私を職場に受け入れるのは、お店にとつて仕事が増えてしまう。だが、そんな私にも笑顔ならで生きると思い、笑顔でいる事を心がけた。自分がお客様の前で笑顔でいられたのか、という事は分からぬが、レジで作業をしている店員さんの笑顔を見て、お客様自身も笑顔で帰つて行く姿を見たので、「笑顔は周りの人まで笑顔にするとても大切な物」だという事を学ぶことができた。

七つ目に「その瞬間を全力で生きる素晴しさ」だ。これは職場体験先の店長から学んだ事だ。事前学習で店長にインタビューを行つた際、「昔の将来の夢は。」という質問に対し、「サッカー選手。」という答えを頂いた。しかも職場は店長以外の全員が女性で、私は勝手に「この仕事が好きではないのだろう。」と思つてしまつた。しかし当日、実際にレジに立つたり、お客様と一緒に商品を選んだりしていた店長は、とても楽しそうだった。電話に出る時も疲れていそうな顔は見せず、とても驚いた。そして、「私もこんな素晴らしい人になりたい。」と強く感じた。

このように二年生になつてからの約三か月間、総合学習から本当に沢山の事を学びとる事ができた。だが私には、大きな『夢』がある。

しかし、店長のように将来の夢を諦めなければならぬ時が来るかもしれない。なので今は、職場体験で学んだ沢山の事を忘れず、勉学に励みたいと思う。



様々なかいと自分の成長

足立区立新田中学校 三年

黒田 梨沙子

私は、中学三年間の中で、様々な体験学習をしてきた。一年の時は、「職場体験」、二年のは、「介護体験」、そして三年になつて、「保育体験」をした。

職場体験では、革製品を扱つておるお店に行つた。財布やバッグ、パスケースなど、とても日常的なものばかりあつた。そのときは、作業というよりは、見学することが多かつた。車に乗せてもらい、麻布十番のお店にも連れていつてもらつた。同じ製品でも、種類やデザインが豊富で、全てに魅了された。お店の方々も、とても優しく、まるで家族の一員のよう受け入れてくれた。

介護体験では、動搖してばかりだつた。利用者の方々にどう話しかけていいか分からず、最初の方はあまり積極的に活動できなかつた。そんな私に、施設の方が優しく教えてくれた。私は、それがとても嬉しく、ゆっくりでもいいから少しずつ話しかけてみようと思えた。笑顔を心がけ、うなずきながらな話を聞く、などとても単純なことから始めた。そのようなことをしていると、利用者さんがとても嬉しそうな顔をしてくれた。私にとっては単純で日常的なことでも、喜んでくれた。とても不思議で大きな発見だつた。

保育体験では、本当に大変だつた。幼児というのは難しい

もので、自己主張が強く、それが通らないとすぐ泣く。また、一方では「一緒にかくれんぼしよう」と言われ、他方では「一緒に山をつくろう」と言われ、両腕を引っ張られる。自分が二人いたらどんなに楽だろうと、心から思つた。でも、私はそんな彼らが羨ましかつた。邪心がなく、純粹で素直である。何のプレッシャーもストレスも抱えずにただ自由に生きている。その様子を見て、私は懐かしくも遠い感覺を覚えた。無邪気に遊び回る姿も、母親を求めて泣く姿も、すべてが心に染みた。なぜだかは分からぬ。人間の本能なのかもしない。昔の感覚を思い出せたことが、たまらなく嬉しかつた。

この三年間の体験の中で、私が学び、自身の成長のために得られたことは何なのだろうか。正直、客観的に表現することはできないと思う。でも、私は確實に言葉では言い表すことができない「何か」を得て、今ここにいる。これからの人の中でも、こんなにもたくさんの人々とふれあう機会は、おそらくほとんどないだろう。そのようにごく稀で貴重な経験を、私はたつた三年間で済ませてしまつた。幼児からお年寄りまでの、幅広い年代の方々と直接お話をすることができた。私の視野が大きく広がつたのだ。

しかし、この日本、そして世界には、もつとたくさんの人々が同じ地球上で暮らしている。そう思うと、自分がとても小さな存在であるように思える。でも、それは誰でも一緒なのだ。同じように価値があり、生きる権利がある。私はこれから的人生で、一体どれだけの人と出会い、分かち合えるだろうか。難しそうなことだが、可能性は無限にある。

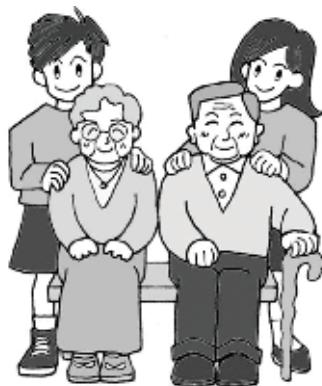
今、隣にいる友達、共に暮らしてきた家族、そして地域の

方々。皆私の大切な仲間である。出会えてよかつたと、心から思う。この気持ちを、日本に広げたい。世界に広げたい。そして、皆と支え合って生きていきたい。

私は、この体験を通して、そして生きていく中で、どれだけの「ありがとう」をもらつたのだろう。どれだけの笑顔を見てきたのだろう。そんなことは、いくら考えたって分からぬ。でも、ただ一つ実感できることは、「ありがとう」を聞く度に、そして笑顔を見る度に、私は少しずつ成長してきたということである。これからも、たくさんの人々の「ありがとう」をもらいたい。たくさんの人々の笑顔が見たい。それが、たとえ小さなことであつたとしても。

今、日本には東日本大震災の影響で、苦しんでいる人がたくさんいる。復旧活動も進んでいるが、まだ完全ではない。私は、彼らのために何ができるだろう。どれだけの人を笑顔にことができるのだろう。たとえ直接会うことはなくとも、何かできることがあるはずだ。

「皆の笑顔を少しでも増やしたい。」これが皆の願いであり、私の願いである。笑顔溢れる輝かしい未来が来ることを、期待したい。



先生という仕事を体験して

葛飾区立堀切中学校 三年

木村友香

私たちは中学二年生のときに五日間にわたって、職場体験をしました。私はこの職場体験というのは、実際に社会の中で働いている人と接し、自分自身もその社会で働く一員として、働くことの大切さや責任感を学ぶ貴重な体験だと思っていました。

私はさまざまな職業の中から、小学校を選びました。理由は子供が好きだし、その子供と触れ合つて、勉強を教えるという仕事、つまり先生の仕事にあこがれていたからです。

私は二年生を担当しました。初めは分からぬことだらけでうまく馴染めず、戸惑うばかりで自分で行動することが出来ませんでした。しかし、生徒が私の事を「木村先生」と呼んで、話しかけてくれたことをきっかけに私は今、小学校の先生としてこの場にいるんだ、と実感し、そこからだんだんと生徒たちとも仲良くなり、今までずっとあった緊張感が一気にほぐれました。

先生は、いろいろな子供がいる中で、みんな同じように接することなどが前提になっていました。これはきっと、子供とのコミュニケーションが大事で、それがまず基本なるからだと思います。昼休みは子供に「ドロケイやろう!」と誘われたり、「あっち行こう」「こっち行こう」と体を両方から引つ

張られて大変でしたが、私は好きでこの仕事を選んだのだから、全てを楽しもうと考えました。だからもちろん昼休みは楽しめたし、これでまた生徒と仲良くなれたと思うとすごく前向きになれました。

もちろん楽しいことばかりではなく、大変なこともあります。それは子供同士のけんかです。やはりまだ小学校二年生なので、なかなか自分の気持ちを相手にうまく伝えることが出来ず、そこでお互いの気持ちのすれ違いが生じ、けんかになってしまつたのだと思います。私はこの時どうしたらいかの分かりませんでした。でもただ見ているわけにはいかなかつたので、止めようと思いましたが、やはり抵抗があり、結局何も出来ませんでした。最終的に担任の先生が来て、けんかを止めました。私はこの時、戸惑うばかりで何も出来なかつた自分、止めようと思つても行動に移せなかつた自分がとても悔しかつたです。

先生というものは自分のことよりも子供たちの事を最優先に考え、どんなに忙しい仕事があつたとしても、それを中断させ、子供を守ろうとします。そんな姿を見てすごく先生を尊敬しました。先生という職業ではそれはあたりまえのことかもしれないけれど、そのあたりまえのことを、周りの事を気にしながらやるということは、完璧にやろうと思つたらすごく大変なことなんだなと思いました。



した。私はあの五日間、迷惑ばかりかけていたかもしません。ですが、子供たちと触れ合い、実際に先生の仕事をしてみてすごくやりがいがある仕事だなと思いました。それを一番感じたのは生徒たちの笑顔を見たときです。私が何も出来なくて落ち込んでいる時も生徒たちが笑顔で話してくれるから、その笑顔にすごく助けられました。

あの五日間は私にとって、長いようでとても短い時間に感じられました。こんな私でも少しあは成長出来たのではないかと思います。この成長は、小学校の先生という職業だけではなく、他の全ての職業においても感じられる事だと思います。最初は何も分からず戸惑うばかりだつたけれど、だんだんわかってきて、自分もこの社会の中で働く大人の中にいるということを実感できるようになつたのだと思います。

この職場体験は自分では気付かなかつた心の弱さと、そこから考えて行動し、人の役に立てたときの喜びを教えてくれました。本当に貴重な体験が出来たことに感謝しています。

職場体験

葛飾区立堀切中学校 三年

齊藤駿稀

私は職場体験でピンセット工場に行つた。何故この工場を選んだかというと幸和ピンセット工場は世界でもとても有名な工場だとテレビで見て知つていたからだ。

職場体験を行くにあたつて、初日はとてもドキドキしていた。私の中ではとても張り詰めた空気の工場内だと思っていたが、工場長を初め、働いている雰囲気がとても良く、緊張がほぐれたことを覚えている。

一番最初にピンセットが作られる過程と仕事の内容をとても分かりやすく説明して頂いた。仕事の内容は、大きいピン

セットと小さいピンセットを少し曲げる作業と、ピンセットの連結部品の長さを調整するための機械による切断作業の（仕事は）大きく分けて三つだった。説明によると、この三つの作業を一定の時間ごとに私達三人でローテーションしていくとてもシンプルなものだつた。

私が初めてついた作業は、大きいピンセットを少し曲げる作業だつた。曲げる手本を見せて頂いたときには、とても簡単そうに見えたが、いざやってみると力の加減が上手くできず、曲がり過ぎてしまつたり、思うように曲がらなかつたり、とても難しい作業だつた。時間は以外にもあつという間に過ぎ、一回目のローテーションになつた。

次の作業は、ピンセットの連結部品を機械で切断する作業だつた。部品を機械にセットして、ペダルを踏むと単純な作業だつた。それからお昼を挟んで、少しすると二回目のローテーションになつた。

三つ目の作業は、小さいピンセットを少し曲げる作業。大きいピンセットと要領は同じなので甘く見ていたが、力加減や曲がり方も大きく異なつてとても苦戦した。集中していたせいか気が付いたら、一日目の職場体験が終わりを告げていた。

職場体験二日目は、何故かローテーションがなく、始めから終わりまでピンセットを切断した。流石に何時間も同じさ作業をしていると、指先が痛くなつたり、集中力も切れたり、色々大変だつた。工場で働いている人達は毎日同じ作業をして、しかも私達の倍の時間働いていると思うと、本当にすごいと思った。

職場体験最終日も、ローテーションなしでピンセットの切断作業をずっとやつていた。二日目とは違い、時間が経つのがとても早く感じた。最後に工場長に話しをして頂いて、最終日も終わりを告げた。

気が付けば、職場体験の三日という時間は長いようで、とても短いものだつた。しかし、私はこの三日間でとても大切な事を学ぶことができたと思う。一つ目は、仕事というのは、同じ事の繰り返しだということ。なんとなく分かつてはいたが、実際に体験してみて改めて知ることができた。二つ目は、自分の仕事に誇りを持つこと。これは最終日に工場長から話をして頂いたことだ。ピンセットは医術で使われる事が多く、

すなわちそれは、人の命を救っているということである。私達が作っているピンセットが人の命を救っていると考えると、とても自分の仕事に誇りを持つと話して頂いた。私は話を聞いて、仕事に誇りを持つことは、仕事をするモチベーションにも繋がるということを知ることができた。

そして、一番この職場体験を通して学んだことは、一本のピンセットを作るのにもたくさんの過程と苦労があること。これは今の私にも当て嵌まることで、目の前の一つ一つをしつかりこなしていくことが将来に繋がるのではないかと思つた。今の中には、将来の夢や、将来やりたいことも見つかっていなかがとりあえず目の前の一つ一つをしつかりこなしていくと思つた。私はこの職場体験でたくさんの大切な事を学ぶことができた。



技術の授業を通して学び考えたこと

葛飾区立堀切中学校 三年

武田絵里

中学生になって「技術」という科目があることを知り、いつたい何を勉強するのかなあと、入学当初は思いました。小学校では無かつたので、「図工」に似てるのかなあというイメージでした。「技術」の授業を実際に受けてみて、技術とは、生活するうえでなくてはならないものだと知りました。人類は、技術を活用することにより、豊かな製品をつくり、便利な生活を送るようになったことも知りました。

一年生の授業では、木製の棚をつくりました。最初の設計段階で苦労したのを覚えています。せっかく作るのだから、実際に使えるものを作るように工夫しました。自分の部屋の中に散らばっている音楽CDと文庫本などの本を整理する棚を作りました。CDと本の大きさを測り、棚の寸法を考えて二段にすることにしました。製図のきまりに従って、図面をかき表すためには、算数（数学）の知識も役立ちました。図面をもとに、木材を切断するために、加工に必要な線やしるしを木材にかきました。この作業を「けがき」ということを知りました。けがき線どおりにのこぎりで切断するのは大変でした。木材の切断には、両刃のこぎりを使いました。横びき・縦びきの仕方を学び、材料をしつかりと固定し、けがをしないように注意をして作業を行いました。のこぎりという

工具ひとつをとっても、仕組みが複雑で、人間が生み出したすばらしい技術だと思いました。棚を組み立てた後、紙やすりをかけ、塗装して完成した時には、充実感があつたのを感じています。また、大工さんの気持ちが、ほんの少しあわかるような気がしました。

二年生の実習では、電源コンセントが三個ついた延長コードと電池式のLEDランプスタンドを作りました。理科で学んだことも役に立ちました。はんだごてという工具があることを知り、コードを端子に接合する時に使いました。断線や接続不良の簡単な故障であれば、自分で修理することができます。この実習を通してより深く理解できました。理科で習った電気の直流と交流について、この実習を通してより深く理解できました。

今では当たり前になつたコンセントが数個付いた延長コードの技術ですが、大正時代には貴重な技術だったそうです。

父に聞いたのですが、昔の住宅は電灯線がひかれているのは居間の照明一ヶ所だけで、壁にコンセントはなく、電気器具を使うためには、電球を取り外して接続したそうです。電灯か家電か、どちらかしか使えなかつたということです。松下幸之助は、その不便さに着目し、ソケットを二段にし、二灯用差し込みプラグを発明し、大ヒットしたことです。

電池式のLEDランプスタンドは、この度の震災の影響で停電が起きたこともあります。私は、非常用として枕元に置くようになりました。LEDは近年発明された技術で、白熱電球の代わりにLEDランプを使うと、消費電力が少なくなり、省エネで寿命も長いので、経済的であることを学びました。

父母が中学生の時代には、男子が技術で、女子は家庭科に

分かれていたそうです。技術の実習と学習を通して私が感じたことは、ふたつとも生活をするうえで必要な知識であるということです。これまで学んだ技術と知識を、今後の生活に役立てていきたいと思います。

時代に応じて必要とされる技術は変わっていきます。これから

の私たちは、ものづくりの大切さを認識し、エネルギー問題や地球環境に配慮した技術を考えていかなければいけないと思います。

職業の役割

東京都立白鷗高校附属中学校 三年

森 正 琢 磨

僕は歌舞伎俳優です。まだ中学生ではありますが、プロの歌舞伎役者として誇りを持つて自分の職業に取り組んでいます。しかし、まだまだ僕には先輩方のように歌舞伎とはどうあるべき、という考えがありません。今回、このように職業に関して見直す機会が与えられたのですから、自分なりに歌舞伎界の役割というものを考えてみたいと思います。

それにはまず、歌舞伎の始まりから考える必要があります。そもそも歌舞伎というものは古来から日本全土に広がる「舞楽」というものが発展して創造されたと考えられています。その舞楽というものの発端は神々に奉納するものとして考

られてきました。つまり、神様を楽しませるための祭りが舞楽だった訳です。それは決して重々しいものではなく、一種のエンターテイメントとして日本中に広まりました。その後次々と新しいアイデアが生み出され、有名な出雲の阿国といふ人が京都の四条河原で踊った歌舞伎踊が今日に引き継がれる歌舞伎の原型であるとされているのです。僕はこの事を調べてみて、古来舞楽と呼ばれていた時代から今現在僕らが毎月興行している歌舞伎というものに至るまでずっと「目的」が変わつていなきことに気付き、感動しました。その「目的」とは偏に見ている者を楽しませる、ということだと思います。その目的だけで、歌舞伎はお客様に支えられ様々な発展を遂げながら四百年余りの間続いてきたのです。

これで歌舞伎自体の役割は分かりました。ではそれに携わる役者の役割とは何でしょうか。僕はそれは一つにはまとまらないと思います。一つには今記したようにお客様を楽しませること。二つには益々日本の伝統芸能である歌舞伎を発展させて世界中に広めること。そして何よりも後世に歌舞伎を継承していくこと。これらはどれも方向性が違うのです。ただ、三つ目の歌舞伎の継承というものはその前の二つにも通じるところがあると思います。何しろ、歌舞伎を今後も発展させ継続していくためにはその時代ごとに生きる役者が、歌舞伎という芝居を受け継ぎ興行をするよりほかないのであります。では芸の継承の方法とは何か。まず一つには先輩が後輩に役を教えるということです。今の時代は本当に有り難い事に僕等若手の役者も時折大先輩の方々がされるような、いわば良いお役を勉強させて頂くことがあります。その代わり、いく

ら若いとは言え、芝居がまづければそれなりに責任もとらなければならない。辛さはあります、良い役をやつていれば、自然と责任感が磨かれていきます。つまりおろそかな事はしないられないという意識が自分の中に芽生えるのです。けれど問題は良い役が付かない時の心構えです。「どうせ自分には責任ないや。」という考え方方が頭をもたげてくる。これでは絶対に後が続きません。一興業、二十五日間やっていますから、つまらない役でも真剣にやっている人と、こんな役だからどうでもいいと思つている人では、周囲にいる先輩方には歴然と分かってしまうのです。どんな役でも懸命にやる役者には先輩方も「あいつ、頑張っているから、今度いい役を教えてあげよう。」ということになります。それが芸を継承するということになるのだと思います。

今まで述べてきたように歌舞伎の役割というものはイコールその時代時代で役者側が努力し力を合わせて日本の伝統芸能をお客様に誇りに思つて頂くこと、だと思います。そのため役者があり、興行を取り行う会社があり、またその芸を受け継ぐという一連の事柄や部所があるのであります。今回改めて考え直す事で、僕を含む若手歌舞伎俳優に今足りてないことが分かりました。これからは積極的に役に取り組み先輩の方々が教えたいと思うような後輩になることが大切だと思いました。歌舞伎という職業のためにも。



ボランティア活動で学んだこと

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

占 部 真理子

私は、都立武蔵高等学校・附属中学校のお菓子研究部に所属しています。お菓子研究部では、活動の中で研究してきたレシピを使って毎回お菓子作りをしています。その活動を生かして「いっしょにクッキング」と「あつたかまつり」という二つのボランティア活動をしています。

「いっしょにクッキング」とは、学校の近くにある幼稚園の園児と家族の皆さんと一緒に、楽しくお菓子を作る活動で、五年前から年に五回実施しています。子供達や家族の方と一緒にお菓子を作つて、焼き時間には、子供達を退屈させないように、図書館で借りた絵本の読み聞かせや紙しばいをしたり、一緒に遊んだりしています。これは、怪我ややけどを防ぐなど安全のためにもなります。

しかし今年はもうひと工夫して、紙しばいを私たちの手作りにしました。紙しばいの内容は、その時に作るメニューの内容にそつてストーリーやキャラクターを考え、描いています。たとえば、メニューが「中華まんじゅう」の場合は、肉まんの歴史についての紙しばいをつくりました。まず、肉まんの歴史を調べ、中国の昔の話だったので、子供達にわかりやすい表現にしました。また、楽しんでもらうために「肉まんくん」や「あんまんちゃん」、「ピザまんくん」などのキャラ

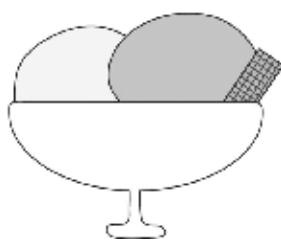
クターはどんな絵を描けば分かりやすいかを考えると、たくさん絵を描くのが大変でした。そして、紙しばいが終わって後も楽しんでもらうために、登場する自分たちの考えたキャラクターを手作りの缶バッジにして子供達に配りました。

その後、お菓子が焼き上がつたら、子供達や大人の方々に食べてもらいます。みなさんに「おいしい！」と笑顔で言ってもらえると、良かつたなと嬉しい気持ちになります。この活動は、小さな子供達の相手をたくさんしなければならないので大変です。そして、お菓子作りと一緒にしたり紙しばいをするだけでなく、事前の準備としてお菓子材料をそろえ、レシピや紙しばいを作つたりするのも大変です。しかし、嬉しい言葉をたくさん言つてもらえるので、やりがいを感じられます。

私は、「いっしょにクッキング」を通して子供達とふれあうこといろいろなことを学びました。お菓子作りを教えるということでリーダーシップを發揮し、工夫も考えられたと思います。子供達は、手の大きさや力の加減など私とは違うことがたくさんあるので、いつもまわりに気を配り、困つています。子供達は、手の大きさや力の加減など私とは違うことがたくさんあるので、いつもまわりに気を配り、困つていることがあります。子供達は、手の大きさや力の加減など私とは違うことがたくさんあるので、いつもまわりに気を配り、困つていていた。また、幼稚園の子供達とその家族の方と一緒にお菓子作りをすることによって、中学生や家族以外の人とかかわる楽しさを知りました。

次に「あつたかまつり」についてです。「あつたかまつり」とは武蔵野市の地域の障がいのある方が主役となつて楽しめるお祭りで、お菓子研究部はこのお祭りに出店し、お祭りを

盛り上げています。私たちは、パウンドケーキやシフォンケーキなどのお菓子を作り、売りだしました。「あつたかまつり」の出店は二年前から始めたのですが、年ごとに販売するお菓子の量を増やしています。お祭り前の二日間でたくさんのお菓子を作ったので忙しくてとても大変だったけれど、その分売れたときの喜びはとても大きかったです。お客様に「これあなた達が作ったの？すごいね。」「ありがとう。」などたくさんのお言葉をかけてもらえて、頑張ってよかつたなとやりがいを感じました。障がいのある方や地域の方に楽しんでもらえるよう、明るくあいさつや宣伝をしたので、この「あつたかまつり」を盛り上げるということに貢献できたと思います。また、午前中ですべて売り切れたので、午後は友達とお祭りを回り、障がいのある方達のお店に行くこともできました。自分も楽しめたし、障がいのある方たちや、その家族の方たちともお話しができてよかったです。



私はこれらのボランティア活動によつて、人とふれあう大切さ、喜んでもらえた時に感じる嬉しさなどたくさんのこと学びました。これからも、喜んでもらえる時のうれしさを忘れず頑張っていきたいです。そしてこれらのボランティア活動を、より進化させていきながら、お菓子研究部の伝統行事として後輩達へと伝えていきたいです。

私はこの夏、職場体験をしました。初めての体験であることや社会で働くということについてあまり知らなかつた私は、職場選択の段階からかなり緊張していました。そんな私に与えられた職場はおもにハンバーガーを作るところでした。

「すみません。」多分これが私が一番多く言つた言葉だと思います。迷惑をかけまいと一生懸命、作業を覚えたつもりでいたのですが、タイミングがずれていったり分量が微妙に多かつたりして、自分で満足のいくようなものはなかなか作れませんでした。これは練習用だったのですが、いよいよ本番用を作ろうとしたとき。担当の方が「一つ一つを本当に丁寧に完璧に作らないといけない。」とおっしゃいました。私は全てを完璧にすることが本当に出来るのかと思つていましたが、その方が言つているのは、一〇〇個の品物を作るとき九九個を完璧に作つたとしても、最後の一箇だけでも変な風に作つてしまふと、その一箇をもらったお客様にとつては、残念な一個になつてしまふから、ということでした。このことを教えていただきおかれで、私はお客様に提供する品物はきれいに作ることが出来ました。そして、やはり何かを作るというのは一つ一つを丁寧に大切に作らなければいけないとthoughtでした。

職場体験で学んだもの作り

東京都立大泉高校附属中学校 二年

入倉美貴

ものを大切に作るという点で、私は学校の技術科の授業でもその重要さを感じたことがあります。

一年生のとき、私は木製のかばんを作りました。初めての単元だったので、私は正確に作業することの必要性を知らず、初めの釘打ちの下書きから、ブレによる何ミリかずれた線を引いてしまいました。これによつて全ての釘打ちの線がずれてしまい、それに構わず作業を続けていると、最終的にはふたの閉まらないかばんが出来てしまいました。初めてとはいってからやり直しましたが、木製のため一部穴が空いたかばんが出来ました。しかしこうなる前に先生は「少しの誤差を許しておくと後で寸法が合わなくなるから定規で正確に測つてやるよう」。とおっしゃっていました。私は、少しの誤差といつてもそれは何センチ単位のことであつて何ミリぐらいはいいだろうと思つていたので、最後、もう少しで完成といふところでふたが閉まらなかつたことで、先生がおっしゃつていたことをその時本当に痛感しました。この苦い経験を生かして次の単元の遠近法、金属加工などは自分の中で正確に作るという点ではうまくできたと思えました。また技術科というのは細かな作業で大変なように思えますが、正確に丁寧にやるからこそ、ものを作るということなんだ、とも思いました。



私は今回の職場体験では食品を主に扱うところに行きましたが、他にも技術科のように「ものを作る」という職場はすごくたくさんあると思います。そのような職場では、今、私が学習している中学校的技術・家庭科の内容がとても役立つと思います。そのため、今の技術科の金属加工での金属の切断、やすりがけ、また家庭科の衣生活での布のミシンがけなど、地道で細かな作業でも丁寧に、そして授業を楽しんで受けていきたいと思っています。また、技術・家庭科に限らず、これから私はどのような職業に就くかは分かりませんが、今、学校で学習していることをできるだけ多く身につけていきたく思います。そのためには中学校的行事や経験も生かせると思うので、今しか出来ない中学校生活を楽しく充実させて過ごしたいです。

働くことについて考えたこと

東京都立大泉高校附属中学校 二年

岩瀬百花

私はこの夏休みに二つの職場を訪問し、働くことについて考えてみることができました。一つは、親戚が営んでいる宝石加工会社に行きました。「綺麗なのが作れるからおいで。」と言われて行ったので、その時は職場に行くというよりは遊びに行くという感覚でした。「宝石を扱って製品を作っているなんて楽しそうな仕事でいいな。」と軽く思つてしまっていたけれど、実際に見学していると、従業員の皆さんが一人一人真剣に作業をしていることがすごく伝わってくるような職場でした。想像していた様子とだいぶ違ったのでちょっと緊張してしまいました。一度は会つたことがある人ばかりが働いているので、話しかければフレンドリーに答えてくれたので安心したけれど、これも働くということで、きちんとした職場なのだと改めて強く感じ、会つたことがある人でも礼儀正しく接するようになりました。

二つ目には学校の職場体験学習で東京都庁に行きました。教育庁に行き、アンケート集計などの事務をやらせていただきました。都庁ということでものすごく緊張していましたが、お忙しいのにも関わらず、すごくあたたかく迎えて下さつてほつとしました。また、丁寧に仕事の内容を教えて頂き、とても感激したことがよく印象に残っています。特に府内の案

内をして頂いた時はその広さに驚き、東京都のことを管理するのに数千人単位の人々とこれだけ大きな建物が必要だとうことが分かり、社会の大変さやすこさを実感しました。

私は今回この二つの職場を通じて、働く、仕事をする上で特に大切だらうと考えたことが三つあります。一つ目は自分の仕事に責任を持つてしっかりとやりきる事です。どちらの職場でも働く人全員が、一つ一つ何か指示を仰ぐのではなく自分で次にすべきことを考えて仕事を見つけながらやつていました。いそがしくても、慌しく感じさせることなく、皆さんがてきぱきっとスムーズに仕事を進めていく様子がとても印象的でした。特に都庁では「行動は素早くきびきびと」という事が課長さんのモットーの一つだそうです。

二つ目は、礼儀やマナーをしっかりと身につけ、相手に失礼のないように動けることです。私は、職場体験の前に散々先生達や親に礼儀はしっかりとと言われ、「そんな事あたり前じやん。」と思つていたけれど、実際にやってみると本当に難しいものだと言うことがよくわかりました。練習していくともいざとなると緊張して大きな声が出なかつたり、すぐに受け答えができなかつたりして予想外のことばかりでした。また電話の取り方やエレベーターの乗り方など、様々な細かいマナーがあり、その場でなんとかできる、という自分の浅はかだった考え方を、今回教えていただきて反省することができました。また、働いていたフロアだけでもたくさん的人がいて、違う人と挨拶するだけでもかなりつかれてしましました。だから、礼儀一つでもとても難しいことだし、完璧にするのはとても苦労がいることだなと思います。

三つ目は自分がやっていることに誇りをもつて楽しみながら取り組むことです。宝石加工会社では金属加工なども行うのでとても危険を伴います。社長さんは指を切つてしまったりの大怪我をしたそうですが、あきらめずに仕事を続けてきたそうです。私だったら、怪我なんてしてしまったらもう二度とやりたくないと思うのに、社長さんはこの仕事が好きだから続けられるし、完成する時がたまらなくうれしいから毎日の仕事の時間が充実していると言っていました。私はその仕事にやりがいをもつていて、それに注ぐ情熱というものが加わり、とても良い物ができるんだろうと思いました。確かに自分の仕事が楽しくなくてもちやんとやっていけるけれど、仕事に少しでも前向きな気持ちになつて、楽しめる所や良い所を見つけ出し、自分でやりとげる喜びを感じられるようになれば、やりがいが生まれて、物づくりに限らずとも、仕事を充実した時間に変えて行くことができるのではないかと私は思っています。

このように今回は短い時間での訪問・体験ではあつたけれど、見たことや聞いたことにくわしく注目していくと、まだまだたくさんのこと学んでいくと思います。今書いた中でも大きな声を出したり、きびきび動いたり、なんでも前向きに考えたりなど、今の私に欠けていたことがあります。これから社会に出ていくという自覚を持つて、きちつと一つ一つを改善していくように、今回、学び得たことをしっかりと生かしていきます。

三つ目は自分がやっていることに誇りをもつて楽しみながら取り組むことです。宝石加工会社では金属加工なども行うのでとても危険を伴います。社長さんは指を切つてしまったりの大怪我をしたそうですが、あきらめずに仕事を続けてきたそうです。私だったら、怪我なんてしてしまったらもう二度とやりたくないと思うのに、社長さんはこの仕事が好き

将来、僕は人と接しながら働けるような仕事に就きたい、と考えている。なぜなら、僕は人と会話することが好きだからだ。人と接しながら働く仕事の一つに、小売店の従業員が挙げられる。何を買おうか迷っているお客様に提案したり、おすすめの商品を紹介したりするのは楽しそうである。

僕は八月の上旬に、大手スーパーで就業体験をさせていただいた。売り場に立つ仕事だけあって、お客様への挨拶の仕方を厳しく教わった。例えば、「いらっしゃいませ」「申し訳ございません」「ありがとうございます」などお越しくださいませ」などだ。初めはそこの従業員が言うような挨拶を現場ではつきりといえるだろうか、と不安に思っていた。その時アドバイスされたのは、挨拶は元気良く、恥ずかしがらずに、そしてお客様が三メートル程まで近付いたら、目を見て言うことが大切だ、ということだ。どんな挨拶をするにしても、これが一番のポイントだ、と教わった。

一通りの挨拶の訓練をした後、売り場に行くと早速お客様がいた。僕は緊張しながらも、アドバイスされた通りに「いらっしゃいませ」と挨拶をした。無視されるだろうな、と思っていたのだが、そのお客様は会釈を返して下さった。本当に気持ちが良かつた。

人と人のために働く

東京都立大泉高校附属中学校 二年

木 村 圭 佑

それに加えて、従業員間の挨拶も重要だ。朝、顔を合わせたら「おはようございます」。自分が先に帰る時は「お先に失礼します」で、相手が先に帰る時は「お疲れ様でした」と言う。これらの挨拶をすることによって、仲間と一緒に働くとの楽しさが生まれてくる。

僕に与えられた仕事は、洗濯洗剤や食器洗剤などの日用雑貨の品出しであった。お客様の邪魔にならないよう、お客様がいない商品棚へスピード的に商品を陳列しなければならない。しかし、その大変さの分、達成感もひとしおだった。自分が苦労して品出しをした商品が売れていく所を見た時は、疲れが吹き飛ぶような心地がした。

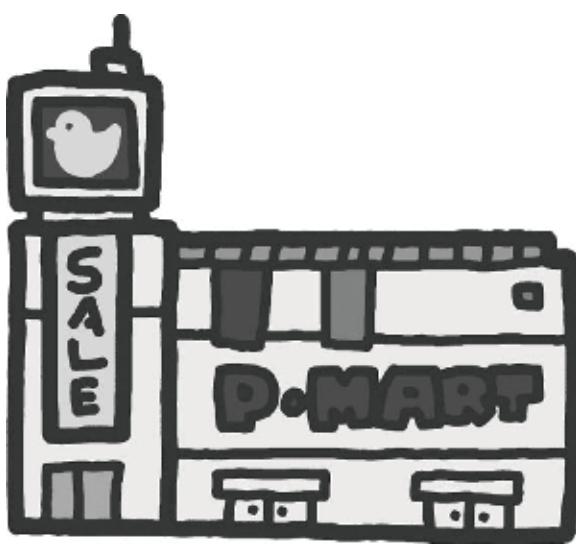
また、お客様に商品が置かれている場所を何度も聞かれた。ほとんどの商品はご案内できたが、土鍋だけは見当たらなかつた。担当の従業員の方に聞いてみると、今は夏なので季節的に取り扱っていない、ということだった。お客様にそのことを伝え、「申し訳ございません」といつて頭を下げるのは、とてもつらかった。せつからく足を運んで下さったお客様のお役に立てなかつたことが悔しかつた。

この他にも大変だと感じたことがあつた。一日中立つていなければならなかつたことと、重い荷物を運んだことだ。特に、大きく重い段ボールを素手で運んだ時は、前が見えないことがあり、注意が必要だつた。

僕はこの就業体験で、二つのことを学び得ることができた。一つは、挨拶は生活の中だけではなく、職場で働く中でも、人間関係を円滑にしてくれるということだ。挨拶をすれば、自分のことを知らないお客様にも良い印象を持つてもらえる

と考えられる。二つ目は、職場では常にお客様の立場に立て考え、行動し、お役に立つというやりがいを持つことが大切であるということだ。やりがいを持つことで、毎日の仕事を気持ち良くこなしていくと思う。

お客様に気持ち良い買い物をしていただくために自分の力を尽くす。これほど素晴らしい仕事は他に無いのではないか、と僕は考える。世の中には人と接しながら働く、すなわちお客様と関わり合いながら働く仕事は沢山あると思う。それぞれの職業の楽しい面と大変な面の両方を見極めながら、自分の進路を決めていきたい。



高等学校の部 最優秀賞

病院実習を通して感じたこと

愛国高等学校 三年

飯 島 奏 美

私は、衛生看護科の三年生です。現在は、火曜日から金曜日までの週四日間、病院実習をさせて頂いています。私は今までに、総合病院、精神病院、介護老人保健施設、産婦人科病院と、計四種類の施設で実習をさせて頂きました。全部で約五ヶ月間ある実習期間の中では、総合病院では、前半・後半合わせて計十二週間と、一番長く実習をさせて頂きます。総合病院の実習では、まず初めに一人の患者様を受け持たせて頂きます。次に、受け持ち患者様の情報収集をし、どのような援助が必要なのかを考え、ケアプランを立てます。そして、患者様に対して実際に援助を実施させて頂くのです。一ヶ月の病棟での実習期間は三週間なので、一人の患者様と長い時間を使って深く関わることが出来ます。私は、受け持ち患者様と接していく中で、多くの感動を得ることが出来ました。これから、私が総合病院での実習を通して感じたことをお話しします。

ある病棟で、私は認知症のある患者様を受け持たせて頂くことになりました。私はそれまでに、認知症のある方と接した経験が一度もありませんでした。そのため、患者様と上手

にコミュニケーションが取れるか、不安に感じていました。やはり、受け持ち一週目は悩むことが多くありました。

例えば、お話をしている際に患者様が、同じことを何回もお話しされた時です。私はその度に「先程も聞きましたよ」などと言わず、初めて聞いたかのように接する努力をしました。始めの数回は丁寧に返答していましたが、さすがに十回を超えると、対応をすることに疲れを感じてしまいました。いくら初めての経験だからとはいえ、患者様のことを受け止めきれていらない自分に腹が立ちました。「どうなんですか。」などと相槌を打ちながらも、その時の笑顔は、引きつっていましたのではないかと、後から思いました。どのような時でも、患者様に対しては明るく笑顔で接しなくてはなりません。ですが、その時の私にはそれが出来ていませんでした。そのことに気付いた時、私は自分自身を情けなく感じました。

他にも、悩んだことは沢山あります。しかし、その中で最も辛いと感じたことが一つあります。それは、毎朝訪室する度に、患者様から「あなた誰。どこから来たの。」と言われてしまうことです。仕方がないと頭では分かっていても、そう言われる度に胸が苦しくなりました。ですが、その辛い気持ちは、段々と変化していきました。受け持ち二週目に入ると、「患者様に私のことを覚えて頂けなくとも構わない。忘れてしまわってもいいから、私と一緒に過ごす時間を楽しいと感じて頂きたい！」と強く思うようになりました。そう思うと、自然と笑顔で患者様と接することが出来るようになりました。段々と、患者様が同じことを繰り返しお話しされた時の対応も、苦ではなくなりました。患者様が笑顔で楽しそうにお話

しされるのを見て、私自身も楽しい気持ちになれたのです。自分が笑顔になることで、患者様をも笑顔にすることが出来るのだと気付きました。自分が笑顔でいることの大切さに気が付いてから、私は患者様との心の距離が、ぐっと縮まったような気がしました。

実習三週目のある日のことです。私は、実習終了時刻の五分前頃に、患者様の所へ、いつも通り挨拶に伺いました。「今日も一日実習させて頂き、有難うございました。また明日もよろしくお願ひします。」と頭を下げる。患者様はふいに、私の手を握られました。そして、「もう帰っちゃうの。まだいいじやない。」とおっしゃったのです。ですが、実習終了時刻を過ぎてまでお話しする訳にはいきません。私は、患者様の手を優しく握り返し、「明日も来ますから、明日またお話しさせてくださいね。」と声をかけました。すると患者様は、私の目を真っ直ぐ見つめながら、「必ずきてね。絶対、絶対。」と、力強く言つてくださいました。私は、嬉しさのあまり、泣き出しそうになつてしましました。必死に涙を堪えながら、私は「必ず来ます。約束です。」と、笑顔で言いました。患者様も笑顔を見せてくださいり、病室を後にする私に、手を振ってくださいました。病院からの帰り道でも、私の胸は喜びに満ち溢れていました。「明日の朝には、患者様にとつて私は『はじめまして』の存在に戻つていいだろう。だがそんなことは関係ない。『もつと一緒にいたい』と思つて頂けたのだから、それでいい。」私は心から、そう思いました。

私は、実習を通して『笑顔の大切さ』と『必要とされるこの喜び』を感じました。この経験と感じたことを、いつも

でも忘れないようにしたいと思います。私は、いつも笑顔が絶えなくて誰からも必要とされる、そんな看護師を目指そうと思います。



高等学校の部 最優秀賞の飯島奏美さん

高等学校の部 優秀賞

私が目指すこと

愛国高等学校 三年
櫻岡 恵

私が愛国高校の衛生看護科に入学して三年が経過しようとします。今私は四週間に及ぶ病院での基礎実習を終え、十二週間の成人実習で看護の学びを深めています。患者様へのケアを行っていく中で接し方に悩んだり、本当にこのケアで良いのかと不安になることもしばしばです。そんな時に思い出すある経験が何か自分を支えてくれているような気がするのです。それは基礎実習で受け持たせて頂いた患者様との忘れる事のない関わりです。

受け持ち患者様のI様は、肺がんのために入院されている八十歳代の女性の方でした。延命治療は行わず苦痛を和らげるという治療を実施する「緩和ケア」を受けられており、最初の挨拶の際これから先どのように関わっていけば良いのかという不安がありました。「本日より受け持たせて頂きます学生の櫻岡です。よろしくお願ひします。」

病室に入り会釈をしながら患者様に挨拶をしました。すると患者様はかすかな声で「よろしくお願ひします。」と答えて下さり私は不安が少し安らぎました。これからの病院実習も頑張つていかなければ、そう思っていた時一つの問題が私を

更に悩ませることになりました。それはコミュニケーションです。ある日のこと、患者様の病室に伺った際、言葉を聞き取ることがなかなかできなかったのです。患者様の発言が分からずその時は何度も繰り返しその言葉を尋ねてしましました。そうしたことが続き患者様とのコミュニケーションはもしかしたら成立しないかも知れないという戸惑いが私を不安にさせました。悩みに悩み、対処が思いつかないと諦めかけた時ふと手にした教科書にその答えが載っていたのです。私はその瞬間、何故気付かなかつたのだろうと後悔しました。コミュニケーションには二種類あり、会話が主である言語的コミュニケーションと表情や仕草から成り立つ非言語的コミュニケーションとあります。私はコミュニケーションは会話のみだと勘違いし、上手な関わりが出来ていなかつたのです。表情や身振り手振りを活用し、コミュニケーションを図つていく必要があつたと思います。そう気付いた頃から徐々に患者様の容態は悪化していきました。

翌日、病室を訪れる患者様は私の問いかけに目を開けて下さつてもすぐに閉じられてしまい受け持ち初日とは想像もつかない様子になられていきました。状態が悪化し酸素マスクをつけられている姿を見る度、心が痛みいつの間にか患者様のベッドサイドに行く機会が減りつありました。そんな様子を見るのも初めてで正直、恐くなってしまったのです。病院からの帰り道や自宅で頭を抱えていた時、自分がもし患者様だったらどう感じるのだろうと考えてみました。個室という環境から対人関係が少ないと衰えていく身体に多くの不安があること、そして何より孤独であること。様々

な思いを抱えて入院されているのだと分かりました。このまではいけない。患者様には本当に失礼であったと反省し、了承を得てなるべく傍らにいさせて頂きました。清拭などの清潔ケアも行わせて頂き、自宅での生活に早く戻つて下されば嬉しいと考えていました。

それから、四日後、指導者の方から「もしかしたら今日お亡くなりになるかもしれない」とお話を伺いました。そしてその日、指導者の方と共に清潔ケアを行わせて頂きました。

身体をタオルで拭くために動かす度、心電図モニターの心拍低下の危険を示すアラームが鳴ります。心の中で「何とか支えて差し上げたい」と思う自分がそこにいました。

「今日もありがとうございました。明日もよろしくお願ひします。」

意識のレベルが低下していても言葉掛けを行い、手を包むように握らせて頂きました。それが患者様との最後のコミュニケーションとなりました。

翌朝、患者様は息を引き取られました。私はお見送りに付き添わせて頂くことができましたが患者様の前では、けして涙を流さないことを決めていました。ご家族の方に心配をさせてしまふと思ったからです。患者様を乗せた車が病院を出ると私の目から涙が溢れました。患者様と自分との関わりがどうであったのか、その時もう少し早くから気付けば良かつたと思いました。

不安で一杯だった実習が密度の濃い四週間となつたのも闘病中なのにも拘わらず受け入れて下さった患者様が支えて下さったからだと思います。本当に感謝しています。

キュブラー・ロスの有名な言葉に「末期がん患者の希望はどんな人でもどんな時期でも持っている」とあります。私が看護学生として緩和ケアについて知識を深めていく中で患者様の自立性やその人らしさを尊重するケアができるようになりたいです。

「私が目指すこと」それは患者様に寄り添う看護です。多くの経験から学んだことを活かして一歩ずつ踏み出して行きたく思います。

酪農体験

東京都立農産高等学校 二年
原 美 優

夏休みが始まつてすぐの七月二十七日、私は、インター・シップで酪農体験をする為に北海道へ行きました。滞在期間は一週間。一週間も家を空けたことがない私は、「向こうの農家の方や牛達と仲良くなれなかつたらどうしよう。」とか「途中でくじけないかな……」とか正直不安でいっぱいでした。去年の酪農体験が口蹄疫の流行で中止になつてしまつたため、「今年こそは」と意気込んでいたのに、北海道行きの飛行機に乗っている時も心の中で悶々と悩んでいました。しかし、私の心配は北海道という土地を踏んだ瞬間、頭の中から消えてなくなりました。だだつ広い土地が広がり、土のいい香りが風に

乗つて空気がとても爽やかです。空もカラツと晴れています。北海道の大自然に「歓迎されているなあ」と感じました。

空港では中標津農協の方々が出迎えてくれ、私がお世話をされる酪農家へ連れて行つてくれました。私が一週間お世話になる牧草地と草を食べる牛、そして所々に民家があります。地元の人に教えてもらつたのですが、茶志骨では自分の家から三キロ以上先までお隣さんと呼べる距離なんだそうです。

伊藤牧場は、お父さん（おじちゃん）とお母さん（おばちゃん）、息子二人にお婆ちゃんの五人家族です。初めて挨拶をした時はお互いにぎこちなかつたのですが、すぐに打ち解けました。初日の作業から、伊藤家のおじちゃん、おばちゃんは私に優しく丁寧に教えてくれました。

私が体験した主な作業内容のひとつは、搾乳前の牛達にトウモロコシなどが入つた配合飼料と干し草を与える事、そして仔牛の寝床に寝藁を敷く事です。飼料を与える際にはフオーケを使用するのですが、これがかなり重かつたのと、フォークを使い慣れていないのとで、干し草を取るのに苦戦しました。また仔牛にミルクを与えていた時には、哺乳している私に仔牛が頭突きしてきましたので驚きました。おじちゃんに聞いてみると、おっぱいを押してミルクの出を良くしようとしているのと、教えてくれました。また、生きるために生まれながらに備わっている本能だと教えてくれました。「ああ、動物も必死なんだなあ。」と仔牛のすさまじい吸引力でベコベコになつたミルク瓶を見て思いました。

搾乳をする牛がいる牛舎では、主に牛の糞の処理をします。

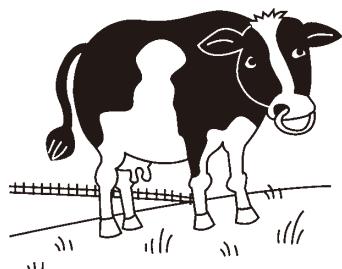
これが一番苦労した作業でした。なぜなら、処理をしても牛がどんどん糞や尿をするのできりがないからです。しかも、糞を受けるはずの溝からかなりずれた所をする牛もいて、とても取りづらかったです。しかし、日を追うごとに手慣れてきて、牛が糞や尿をするタイミングが分かるようになります。また、処理をしながら牛達にスキンシップを図りました。牛達は、最初は警戒していて、なかなか触らせてくれませんでした。触ろうとしてもそっぽを向いたり、尻尾で叩かれたり、終いには牛と牛の間に挟まれたりしました。酪農体験四日目によく警戒心が無くなつたのか触らせてくれる牛も増えて「もっと触れ」といわんばかりに頭をこすりつけてくる牛もいて、ものすごく感動しました。

体験中に気づいたことですが、毎日同じ餌を食べているのにもかかわらず、牛にも好き嫌いがあるようです。それに気づいたのは、搾乳をする牛の食事を覗いた時でした。牛の餌は、干し草・配合飼料・そしてビートパルプです。ビートパルプとは、ビートと呼ばれるサトウキビのような植物の搾り粕を発酵させて作った飼料のひとつです。しかし与えてみると、配合飼料と干し草は食べるのに、ビートパルプは鼻でよけて食べようとしない牛がいました。疑問に思い、おじちゃんに尋ねてみると、「外国産のビートだから美味しいんだと思う」ということでした。国産のビートは香りが高く、牛も好んで食べててくれるのですが、国産のものは値段が高いと感じる現状があり、伊藤家では外国産のビートパルプを使用しているのだそうです。牛のためにも、国産のビートが少しでも安く手に入るようになればと思いました。毎日毎日、これ

らの作業を含め、色々な仕事をローテーションで行います。酪農が大変重労働であることと、経営から実務まで、幅広く知識や技術が求められることを学びました。

私は、体験中に三回程牛の出産に立ちあう機会がありました。生まれたての仔牛は、羊水や地面の土で汚れていきましたが、白と黒の模様もきちんとあり、とても可愛く、母牛と寄り添う姿は微笑ましかったです。母牛や私達が見守る中、よろよろしながらも立ち上がった姿を見たときは、目頭が熱くなるのを感じました。今までにない位感動していた私ですが、生まれた仔牛が雄牛であり、雌牛しか扱っていない伊藤牧場では一週間育てた後、別の場所に雄牛を引き渡すということを知りました。雄の場合、種牛として育てられるか肉牛として育てられるかのどちらかで、最初は残酷だとと思いました。けれど私も牛肉を食べます、豚だって鶏だって食べます。あの仔牛が肉になつても感謝して食べてあげなければと考えるようになりました。私達は、様々な命を食べて生きているのですから。

この体験を通して、私は生命について、生きることについて、人と人との繋がりの大切さについて、北海道の人たちや風土に触れて改めて考えさせられました。これからも私はたくさんの人たちと一緒に成長していきたいです。北海道酪農体験はそのきっかけを作ってくれました。すべてのことに対する感謝しながら自分の道を定めていきたいです。



存 在 理 由

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

山 崎 明 日 香

私は物心付いた頃から、よく自分は何故生きているのだろう、と思つていました。今の高校、そして畜産科学科に入り、命と密接に関わる様になってきた今では、その疑問は更に私の中でも膨らんでいました。

二年生になり、命についてもっと深く勉強したいと考えた私は、養豚類型を専攻しました。そして、私の昔ながらの疑問を更に増幅させた一頭の子豚と出会つたのです。

その子豚は、私が気付いた時には既に隔離されていました。信子という愛称の大ヨークシャーから生まれた、オスの子豚でした。その子は生まれたばかりの頃は他の兄弟達と一緒に所で生活していましたが、どうやらその時に左の後ろ足をケガしてしまった様なのです。これ以上、同じ所で飼育していたら兄弟達にいじめられて死んでしまう、という事で隔離されていました。隔離される前こそ気が付かなかつたその子豚に、私は少し興味を持ちました。

出会つて間もない頃の子豚の目は、一言で言えば死んでいました。全てを諦めている様な、そんな目でした。その時、私はこの子豚はこのまま死ぬのだろうか、と思いました。そこで、私の疑問が浮かんできます。「じゃあ、この子が生まれてきた意味って何だろう」と。肉豚として生まれてきたこの

子豚に、肉になる以外の道があるのでしようか。逆に言えば、もしこの子が肉豚として出荷される前に死んでしまつたら？と思うと、この子が生まれてきた意味が無くなってしまうのではないかと思うのです。

それから私はどうしてもこの子豚に肉豚としての一生を送らせてあげたいと思いました。端から、しかも一般的な目で見たらその考えは私のエゴかもしれないし、理解してくれる人は少ないのではないかと思います。けれどこの子はあくまで「肉豚」として生まれてきたのです。簡単に言つてしまえば「食べられる為」だけに生まれてきたのです。我々人間が生きる為に存在する。家畜とは、そういうものだと思います。

私はその子豚の担当ではありませんでしたが、暇さえあればその子豚の手当てをしに豚舎へ顔を出しました。私が手当てをしに行くにつれて、その子も慣れてきたのでしよう。次第に私に甘える様なしぐさを見せてくれました。そこで、足が悪いからという理由で、私は勝手にその子を「クララ」と呼んでいました。遂には名を呼ぶと反応して、変形してしまつた足をかばいながら私の元へ来る様になっていました。一匹だけで寂しいのでしょうか、もしかしたら人間が構ってくれるのが嬉しかったのかもしれません。最初こそクララのその行動が嬉しかった私ですが、クララと一緒に過ごす時間が増えていく度、私は一つの不安を覚えたのです。もしかしたら、私はクララを肉豚としてではなく、ペットの様に見てしまつているのではないか、と。クララは私が様子を見に行く度に目を見ると、最初に見た時の死んだような目ではなく、生きようとしている、キラキラと輝く瞳をしていました。それと

反比例して弱っていく体を見ていると、私が飼っている愛犬に抱く感情と同じ様な感情をクララに対しても抱くようになつていきました。そしてその頃、先生がクララの肥育をやめ、もう淘汰しようかという提案をしたのです。クララはたまに、足が痛むのか悲痛な叫びをあげていました。私はそれに気付いていました。先生は、これ以上クララを痛みに耐えさせ生かすのは可哀想だというのです。豚は人の言葉を話せません。クララの意見を聞くことはできません。きっと養豚農家だったらクララはとっくに淘汰されていたことでしょう。それが現実です。私としてはクララを淘汰せず、たとえ難しくても肉豚としての使命を果たさせてやりたいと思いました。でも、それは私の意見であつて、クララはもう本当に苦しくて辛いのかもしれないと思うと、苦しみから解放してあげた方がいいのかもしれない、と思いました。

どうしても自分一人で答えを出せなかつた私は、養豚関係の仕事をしている先輩に相談をしました。クララの事や私の意見を全て話しました。先輩は真剣にアドバイスをして下さいました。先輩はまず、君はちゃんとクララのことを家畜と見れているよ、とおっしゃつて下さいました。そして「学校と養豚農家は違う。学校は学ぶ所だから、色々試してみたつていいと思う。だから、やれるだけやってみたらい。それも勉強になる筈だから」と、アドバイスして下さいました。その時私は決心しました。やれるだけやってみようと。

後日、私は自分の意思を先生や同じ養豚類型の仲間、先輩方に伝えました。皆さん理解してくれました。そしてクララは最後まで学校で面倒を見ることになったのです。

それから一ヶ月程の月日が経つたある日。私は類型の授業中に先生から衝撃的な宣告をされました。クララが、死んだということでした。でも私は薄々感付いてはいたのです。私が最後にクララと会った二日前の時点でクララは誰が見ても分かる位、弱っていました。体は痩せすぎて背骨が浮き出でおり、歩く事が出来ず、エサも食べられずでした。死因は衰弱死だそうです。私は助けてやれなかつた自分が悔しくて堪りませんでした。

放課後、私は冷凍庫で眠っているクララに会いに行きました。クララの体を持ち上げると、出会って間も無かつた頃より遙かに重くなっていました。こんなに大きくなってくれたんだなと、少し目が潤みました。

私が昔から抱いてきた疑問は、クララとの出会いによつて解決しました。生きている意味とは、ではなくて生まれてきたことが意味なのだと。最後の最後まで生きて、それを教えてくれたクララに、私はとても感謝しています。



高校・専修学校の部優秀賞の皆さん



表彰式風景

看護実習を経験して

愛国高等学校 三年

釣 本 い づみ

「絶対看護師になる。」と改めて決意したのは、衛生看護科の高校に入学し、基礎看護実習を終えた後のことです。

中学三年生の高校受験を控え、悩んでいる時期に突然母から「看護師を目指してみたらどう?」と勧められました。母の思いがけない提案に戸惑いはありましたが、以前から医療関係の仕事に関心があつたため、看護師を目指そうとしました。高校から看護の専門的な勉強がしたいと思ったのは、最短で看護師の資格を取得できることと、また、最短で資格を得ることで、実践的な場で多くの経験ができ、自信がつけられると思ったからです。

入学後、看護の授業では難しい専門用語に頭をかかえながらも、技術取得に取り組んできました。高校二年生の二学期、一定期間看護の基礎を履修し、将来看護を職業として選ぶ決意を新たにした生徒たちに対して行われる戴帽式で、ナースキャップを頂きました。

高校二年生の三学期から、基礎看護実習が始まりました。私達看護学生として、初めて病院という実践の場で学ばせて頂きました。

私は整形外科病棟で実習させて頂きました。この整形外科病棟では、骨格、関節、筋肉、神経などの運動器系統の機能障害を持った患者様が入院されていました。私が受け持たせて頂いた患者様は、自分で下半身を動かすことができないため、ベッド上で生活を余儀無くされてしまいました。あまり水分をとろうとしない患者様に、脱水症状を起こさないために、水分摂取をこまめに行なつていただきました。あまり水分をとらぬと伝えたのですが、患者様は「尿の回数が増えるから嫌。とりたくない。」とおっしゃいました。そこで私は、「では、こまめに水分摂取を行わなくていいので、リハビリ後と入浴後には必ずお茶を飲みましょうね。」と言つたのですが、患者様は無言で頷くだけでした。その後、ナースステーションに戻り、患者様と私の会話の遣り取りを振り返つてみて私の考えを一方的に患者様に押し付けてしまつたのではないかと思いました。もつと脱水症状のことを説明し、理解して頂いた上で、水分摂取を促したほうがよかつたと思いました。同時に、患者様に説明するには正しい知識が必要で、事前学習をすることの大切さが改めてわかりました。患者様がおっしゃっていた「尿の回数が増えるのが嫌。」ということは、トイレに行くまでに何か患者様にとって障害だと感じることがあるのではないかと考えました。そして、リハビリの時に「痛いから動きたくな。」とおっしゃっていたのを思い出しました。関連性を持つて考えてみるとこれらの言動から、足の痛みがあるために、トイレの回数などの移動をなるべく減らし、足に負担をかけないようにしたいと患者様は考えているのではないかと思いました。病室に戻り、患者様に「足痛いですし、トイレの回

数が増えて、移動するのは辛いですね。でも、リハビリがてらにと思ってみたらどうですか。」と言つたら、患者様は「本当は痛いから嫌だけど、あなた、私のことを考えて、わかつてくれたし、いいわよ。」と笑顔でおっしゃいました。患者様の痛みに共感することで、患者様は自然と心を開いてくれるのだと感じました。また、少しの言動からでも、患者様の思ひがこめられているので、それに気付くことが重要なのだと、身を以つて学ばせて頂きました。

この基礎看護実習で多くのことを学ばせて頂きました。学校では、教科書通りで通用していたものの、いざ実践の場では、多くの患者様が、様々な疾患を抱えていて、性格や日常生活というのは一人一人違ってきます。同じ疾患を抱えている患者様に対し、同じ援助をすればいいのではなく、その患者様の性格や日常生活様式に合った援助をすること、患者様の個別性を考えることが大切だと学びました。この基礎看護実習で、多くの患者様や医療従事者と関わりました。その多くの方々が、将来の私達を必要としていました。「絶対看護師になつて、多くの人の役に立ちたい。」と、決意をより一層強くした実習となりました。



愛国高等学校 三年
野 崎 恵 美

実習でのできごと

「初めまして。愛国高等学校から來た学生の野崎恵美です。実習させていただく三週間どうぞよろしくお願ひします。」そう挨拶をしに私はベッドサイドまで移動をした。患者様はベッドで横になつており、私の方に顔だけを向け「ああ、よろしく。」との一言を残し寝てしまつた。私は正直「気難しい方かな」と思つていたが、それも患者様の状態を理解すれば当然のことだつた。

患者様は少しの行動でも息苦しくなり、とても辛そうであった。患者様はターミナル期であつたのだ。ターミナル期とは「可能なかぎりの治療を尽くしても効果が期待できず、生命予後がおよそ六ヶ月以内と考えられる段階」のことだ。そのため患者様が息苦しいと言えば酸素を投与したり、「どこが痛い」といえば痛み止めの薬を飲むなどの症状緩和を行うという医師からの指示であつた。私が三週間で、患者様にできること。学校の先生や、また同じチームの人相談した結果、不十分なことがあれば手助けをする身体的サポートはもちろん、何より「精神的サポート」に重視するよう心がけるようにした。

キューブラー・ロスの「私たちはみな死ぬ。だから死は敵ではない。敵は孤独。」という言葉。私にとつて患者様に行え

る精神的サポートとは孤独にしないことだと思つた。

患者様への精神的サポートは、患者様を受け持つた次の日から始まつた。患者様は自分が思うように行動できず、いら

だちや怒りを表現してくるようになり、またこれから自分の症状がどうなるのか不安で「もうこんな生活は嫌だ。早く帰つて自由にしてほしい」と患者様は私に訴えてきた。私は、どんな言葉をかけることよりも傾聴し、患者様の気持ちを理解するようにと心がけた。すると日を重ねていくにつれ患者様は過去の話や今思つてることを患者様から話してくれるようになつた。私はどんなことよりも嬉しかつた。患者様が私に心開いてくれたんだと思えた。けれど、やはり嬉しいことだけではなかつた。一週間に一回行われる検診。結果は正直なもので、患者様の身体的衰弱が見られると共に症状も悪化しているとのことだつた。患者様は、その状態を察知していたのか、表情もとても暗くまた悲しそうだつた。患者様は私に「こんな痛みを我慢するぐらいなら死にたい。俺は生きてる意味がないんだ。」とぼそつと呟いた。「死にたい」といつた言葉が出てくるとは思つてもいなかつたため私も「辛いですね」と言つた言葉しか掛けられなかつた。患者様は、私が掛けた言葉に対して「健康な人には俺の気持ちなんか分からぬ」と泣きながら言つた。私はそれ以上声を掛けられず、背中をさすつては涙を拭き、話に聞き入れることしかできなかつた。患者様は私に言つた。「傍にいてくれてありがとね。君は悪くないのに暗い雰囲気にさせちゃってごめんね。」と。私は嬉しさ半分、何もできない自分に対し悔しさと悲しみが込み上げ、涙が出そうになつてしまつた。私はこれを機に気

持ちが変わりより支えなければならないと思つた。残りの少ない日々で患者様の感情に焦点をあて、より理解するような態度で接した。

実習最終日。患者様にさよならの挨拶をした。気持ちが入つていた分、別れはとても辛く感謝の気持ちと何もできない申し訳のなさで胸がいっぱいであつた。患者様からは「近くにいてくれた分、俺はとても嬉しかつた。君なら立派な看護師になれるよ。辛いことあつても乗り越えていい看護師になるんだよ。」と私に残してくれた。

私はこの実習を通して、授業では学べない患者様の心境というものを目の当たりにした。孤独というものは誰でも怖いものであり、決して一人では生きていけないということを改めて感じられた。患者様が掛けてくれた「いい看護師になるんだよ。」と言つた言葉を裏切らないよう努力して、患者様を支えていけるような看護師になりたいと思う。



実習やボランティアを 通して学んだこと

蒲田女子高等学校 三年
進 藤 有紀美

私は、あしながら学生募金の募金活動、そしてPウォーカーというボランティア活動を行った際、気づいたことがいくつありました。

まず、子どもから大人まで多くの人が募金してくれて「頑張れ」と声を掛けてくれたことです。一人一人の温かい言葉

が私に元気と勇気をくれました。次にこの募金で遺児の奨学生を支援することができ、学校に通うことが実現します。多くの人が私達と同じように社会にでることが出来ると考えると今まで非常に嬉しい気持ちになりました。そして私たちがボランティア活動で多くの人の力になれるという実感がわき、さらに募金活動を推進していく必要があると強く感じました。また、誰かの役に立つために行動することが自分自身の成長につながっていくことも身を持つて経験することができました。

笑顔でした。その笑顔をみたとき、祖父母を今以上に大切にして笑顔を増やしてあげたいと感じました。そして、食事の際の笑顔も印象的に残りました。家族のように居間で皆と集まって食事している笑顔は、私が幼い頃に家族全員集まつて楽しそうに食事している風景に似ていました。今では別々に食事をとり、笑顔も家族との食事も少なくなつていて今回、利用者さんと共に食事をし、楽しい時間を過ごすなかで家族の大切さを気づくこともできました。いくら忙しくても家族一人欠けてしまふと笑顔は減つてしまふ。だから、これをキッカケに家族や祖父母と多く接し、笑顔を増やしていきたいと思いました。

そして施設で働いている職員さんは、皆優しくて笑顔でいることに気づきました。利用者さんを悲しませないようとにかく掛けていると言っていた方がいて頼もしくて憧れを抱きました。職員さんのおかげで利用者さんも豊かな生活ができるのではないかと思いました。

次に利用者さんは、車イスの方が多いのですが、不自由なのにそんなそぶりも全然みせず、ラクラクと進んでいたり、段差も気軽に乗りこえたりするのを見て、前向きに行動している姿を見て、私も何事にも挑戦

しようと思うことができたし、利用者の笑顔で私も私以外の人も救われると思い、大変勉強になりました。もしも私が利用者さんの立場になつたら皆に笑顔をあげられる前向きな人になりたいと感



じることができました。

私が将来、福祉関係の仕事につく際に気をつけたいことをこの実習やボランティア活動で学び、気づくことができたと思います。それは、「笑顔・明るさ・優しさ・声の大きさ・やる気・努力」だと思いました。

私は元気がなければ利用者さんまでネガティブになってしまい、優しさがないと利用者さんに怖がられ、失礼にあたると思います。声が小さいと利用者さんに伝わらないし、笑顔で接しなくてはいけません。全て努力が積み重なって成立するのではないかと思います。

福祉はたいへんに辛く厳しい職業だと思っている人が多いですが、私は楽しく、自分自身も成長できる職業だと思います。実際施設に行つて大変な作業もあつたけれど何よりも利用者さんも私も成長でき、共感することができるところが福祉の魅力だと感じました。医療も福祉もこの世界中で必要とされています。私はもつと医療や福祉を充実させるべきだと思つてます。

ボランティア活動と実習を通して共通している点は、多くの人から笑顔ややる気をもらうことができて自分自身も成長し続けられるところだと思います。

この経験で私は福祉との関わりを通して、見方が変わつてきました。そして性格も変わり始めました。

人を思いやる気持ち、優しさ、成長、前向き、福祉のおかげでいろいろな勉強ができました。そして何よりも自分の将来を創ることにつながりました。最初の頃は福祉を苦手と感じることもあり、実習も辛いと思つていました。けれど、今

回このボランティア活動や実習での交流で福祉に関わることができ、今となつては本当に良かったと思っています。この経験をすべてにおいて生かし、今後も福祉と向き合つていきたいと思います。

北豊島工業高校に入学して

東京都立北豊島工業高等学校 一年

田 中 さ や か

私は、自動車整備士や旋盤技能士などになりたくて、北豊島工業高校に入学したわけではありません。ただ単に、「家から近かつた」という理由だけで、入学することを決めました。

実際に入学してみると、男だらけの教室、ネイルさえも折れたりはがれたりしてしまった工业実習、かわいげのない実習着など、気に入らないところは沢山ありました。中途退学を考えたことは、一度もありません。その理由を書きたいと思います。

退学を考えないでいられる一番の理由は、クラスメイトの存在です。工業高校ということもあり、クラスメイトは、ほとんど男の人でした。私は、昔から男の人が好きではなく、同じ中学校から一緒に入学した女の友人と、ずっと一緒にいました。他の生徒を避けていたわけではなく、あまり関わりたくなかつたのです。けれども、クラスメイトは、私が以前

から抱いていた「男の人」のイメージとは正反対で、皆とても親切してくれました。実習の授業では、ヤスリがけや工具の運搬などの力仕事を手伝ってくれて、とても助かったのを今でも覚えています。私がこの学校をやめないで続けていられるのは、きっとクラスメイトが、私の抱いていた「男の人」のイメージを大きく変えてくれたからだと思います。いつもふざけあって、笑いの絶えない今のクラスとクラスメイトが、私は大好きです。今のクラスメイト全員で卒業できることを心から望んでいます。

二番目の理由は、やはり、よい先生方に巡り会えたことです。私は、小学校でも中学校でも、先生や他の生徒から見て、あまり良い生徒ではありませんでした。義務教育にもかかわらず、出席停止になつたり、「転校してほしい。」とか「片親だからこんな風になつちやうのね。」などと、言われたりしていました。そのため、私は先生が大嫌いでした。ところが、高校に入学して間もない頃、ある先生に、「卒業するだけが学校じやない。夢を見つけたら辞めたつていい。でも、目標もないのに辞めるのは止めなさい。」と言われました。私は、卒業するのを目標に学校に來ていたので、あ然としました。よく考えてみると、私が高校に入ったのは、小学生や中学生だった頃の私を、傍らで見守つてくれた、親に対する反省の気持ちからでした。親に迷惑をかけたという気持ちが、私の中でいつの間にか「高校を卒業しなければならない。」という義務感になり、目標になっていたのだと気づきました。

この先生の言葉で、私は初めて、自分の将来のために学校へ行こうと思いました。その上、北豊島工業高校に入学して、

私の先生に対する概念が、全く変わりました。私の話を真剣に聞いてくださる養護の先生、いつも笑わせてくださる実習の先生方、資格試験のための勉強を教えてくださる副校長、職員室に行くたびに話し相手を聞いてくださる先生方、そして、とても親身になつてくださる担任の先生と部活動の顧問の先生。私が心を開いた分だけ、先生方も受け止めてくださって、毎日がとても楽しいです。あれほど先生が嫌いだった私たちは、先生の言葉で揺らぐなどとは信じたくありませんでした。けれども人生経験の少ない私が、勝手な先入観から、「先生は皆一緒。信じられない。」と思いつこんでいたことが、まるでシャボン玉のようにはじけて消えていきました。

三番目の理由は、部活動を始めたことです。私は野球部のマネージャーを務めています。今でこそ、様になつてきましたが、「カツコイイ先輩がいるから。」という甘い理由で、野球のルールなど知らないで入りました。案の定スコアも書けず、部員の名前も全く把握していないという、最低なマネージャーでした。見るに見かねた部長に呼び出されて話し合つた結果、まず、部員の名前と顔を一致させることにしました。『こんな多人数、覚えられるわけはない。』と最初は思っていました。でも、先輩と親しくなることが目的で入つたと、思われたくない一心で、努力だけはしてみようと思いました。すると、一週間、二週間と経つうちに、以前のことを笑えるくらい、部員の名前がわかるようになり、一つ壁を越えた気がしました。しかし、スコアには手こずりました。マークも数字もよく分からず、やはり私にはできないと、自暴自棄になりました。何度も逃げようとしました。けれども、逃げようとす

る度に、部長や先輩が支えてくれ、夜遅くまでスコアの書き方や読み方を教えてくれました。すると、みるみるうちにスコアが書けるようになりました。当たり前のことかも知れませんが、皆がほめてくれたので、今ではスコアを書くのがとても楽しみです。私は、野球部での経験から、「諦めないで頑張れば、報われる。」ということを学びました。これは、私の中でも、ずっと光り続ける言葉だと思います。

私は、今、自分の将来のために、様々な資格取得に挑戦しようと、勉強をしています。今の目標は、危険物取扱者丙種と漢字検定準二級の資格取得です。難しくても、諦めないで、努力を続けるつもりです。

マドレーヌから学んだこと

東京都立忍岡高等学校 三年

後藤 菜保子

私は小さい頃から菓子、特に洋菓子を食べることが大好きでした。中学生になつてからは、食べることだけではなく、作ることにも興味を持ち始めました。三年生の時の選択授業では真っ先に家庭科を選び、友達と菓子作りを楽しんでいました。時には失敗することもありましたが、それはそれで楽しかったです。そして菓子作りが大好きになつた私は、もつと菓子や食のことについて学びたいと思い、家庭科の専門学

科がある忍岡高校に入学しました。

一年生ではまず、食事の生理的、社会的役割から学び、その後も食について様々な角度から、たくさんのこと学びました。また、知識だけでなく、二年生の時には和、洋、中の料理を作つたり、菓子を作つたりと、実習を通して実技も学びました。そして二年生の終わりには、一年生の時から目標にしていた、食物調理技術検定の一級に合格することができました。

生活科学科に入学してから、私は食についてのたくさんの授業を受けてきました。その中でも一番印象に残っているのは、一年生の時の生活産業基礎という授業です。その授業の一環で文化祭の時に食品販売がありました。自分達が作ったものを販売できると聞いて、私はただただ楽しい想像ばかりしていました。しかし、実際はその様に甘くはありませんでした。まずは何を売るのかというところから始まり、その商品のパッケージのデザインまで全て自分達でやらなければなりません。皆の話し合いがまとまらなかつたり、まとまつても先生からの指摘を受けたりと、自分のツメの甘さを身をもつて実感しました。商品であるマドレーヌの製造に入つても、大きさや焼き色などについて注意を受けることがたくさんありました。一つの商品をどれも同じ様に大量に作るということは予想以上に難しく、厳しいものでした。集中力が続かず、商品にならないものを作つてしまつたり、一生懸命やつていて良くならなかったりした時には、「もう嫌だ。」と思うこともありました。だから、文化祭でマドレーヌが即完売した時は、今までに味わつたことのない達成感がありま

した。そして何より、完売したことがとても嬉しかったです。

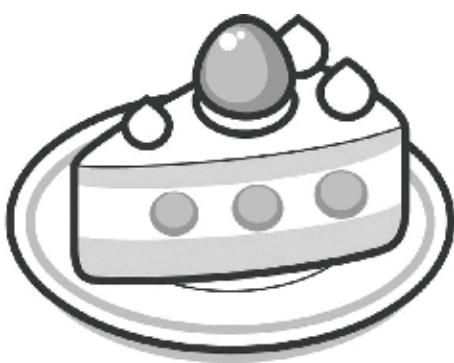
私は食品販売を通して学んだことが二つあります。一つめは「協力し合う」ということです。原価計算から販売までを全て一人でこなすというのはかなり厳しいことだと思います。

一緒にやる仲間がいて、協力し合うからこそ、販売まで成り立たせることができました。二つめは「お客様に提供する」という意識です。マドレーヌは自分のためではなく、お客様のために作ります。どうしたら安全に、よりおいしく、より喜んでもらえるのかができる限り追求しました。例えば安全面では、髪を三角巾から出さない、爪を短く切るなどです。よりおいしく食べてもらうために、材料をきつちり量つたり、発酵バターを使う工夫をしたりしました。その当時は、「なんとなく」の配慮で、言われるからやっていた、という部分がありました。しかし今ではこの「お客様に提供する」という意識が、私の中で大きなものになっています。

私は友達に菓子をあげることがあるのですが、菓子作りにおいて、自分の中のルールがいくつかあります。そのルールは先ほどの爪を短く切るなどという他に、道具をていねいに使う、ラッピングも自分で考える、というものです。ラッピングする時は、クッキーやマドレーヌの場合、大きさや焼き色が揃っているか、確認してから袋に詰めています。袋には自分の指紋がつかないように注意しております。菓子を渡す相手はほとんどが友達ですが、私はその友達も、私の菓子を食べてくれる「お客様」だと思っています。だから菓子の組み合わせからラッピングまで、妥協はしたくありません。いつも自

分なりの最高を目指しています。今私が述べたことは、自分の中のルールというよりも、食材や食品を扱う上で当たり前のこともしません。しかし、これらのルールを基礎として、もっと発展させることができたら、これからの自信や強みにつながっていくと信じています。

私は高校卒業後の進路は、大学と専門学校のダブルスクールができる大学を選びました。専門学校で技術だけでなく、大学で菓子をもつと栄養学的な視点から学びたいと思うようになったからです。そして将来はおいしい菓子を作つて、お客様を笑顔にするパティシエになりたいです。そしてその夢を叶えるため、これからも「協力し合う」ことと、「お客様」に対する意識を忘れずに、菓子作りを楽しみ、追求していきたいと思います。



将来の夢

東京都立忍岡高等学校 三年

山田 希

私が今、目指している職業は、保育士です。一口に保育士と言つても、その資格を使つた仕事は様々です。中でも私は、この資格を使い児童養護施設で働きたいと思つています。なぜなら、子どもが大好きで少しでも子どもたちの力になりたいと考えているからです。

小学生の頃は、ただ漠然と子どもが好きだから保育士になりたいと思つてゐるだけでした。そこから、中学校での勉強・実習で子どもと触れることの楽しさを知り、もっと深く子どもについて学びたいと思うようになりました。そこで、家庭科を中心に行なうことができるこの高校に入学することにしました。高校に入学し、家庭科を学んでいくうちに、保育についてや子どもについての自分の考え方があまかたと感じる所と同時に、色々な角度から見ることができるようになります。

特に印象に残つてゐる家庭科の授業は、二つあります。一つ目は、二年生の奉仕の授業でのボランティアです。このボランティアは、児童館での料理教室をサポートするというものでした。始めは、緊張とサポートできるかという不安でなかなか子どもたちと話すことができませんでしたが、子どもたちの方から話しかけて楽しく料理をすることができた。

ました。料理をしている最中では、包丁の使い方や熱い鉄板に触れないようにするなどに気をつけながら仕事分担をし、ケンカもなく進める事ができました。このボランティアでは、子どもと一緒に料理をするときに注意する点、どのように説明するのが分かりやすいのかのこの二つに頭を悩ませました。ですが、手探りながらも包丁の持ち方や料理説明をうまくできたので良かったです。

二つ目は、三年生の発達と保育の授業で保育園実習を行つたことです。その実習では、三歳児を担当しました。保育園の先生に「こどもたちと遊んでください。」と言われたのですが、何をして遊んでいいのか分からず、しばらく戸惑つていきました。でも、子どもたちに話しかけるとすぐに遊び始めたことができたので、少し落ちつくことができました。その後もプールや昼食も終わり、ただ遊んでいるだけでいいのかと疑問に思つていたときに、いつまでも歯磨きをしない子を見つけ、なんとか歯磨きをさせようとしたのですができませんでした。そこに保育士さんがきてその子を出入り口のドアまで抱えていき、子どもの目を見て真剣にゆっくりとした口調で注意していました。その光景を見て遊んでいるだけではなく、子ども一人一人をよく見て、何がいけないのかをしっかりと伝えているのだなと感じました。

この二つの授業の体験を通して、何も考えずにただ遊ぶのではなく、子どもと真剣に向き合う大切さを知ることができました。そして、今まで考えてきた自分の考えが大きく変わった体験でした。今まで私は、笑顔を絶やさない元気な先生が理想なのだとばかり考えていました。でも、それは間違い

なのだと気付くことができました。時には厳しく接し、これから成長していく子どもたちに生きていく上で必要なことを伝え、導くことが最も重要なだと考えるようになりました。

その他にも、一級検定取得の授業や様々な分野の家庭科の授業からも、視野を広く持ち色々な角度から物事を見るということを得ることができました。このことは、自分を大きく成長させることができ、考え方も広がりました。

今現在、少子化が進んでいるのに待機児童が増えているという矛盾が起きています。毎日のように幼児虐待のニュースが流れています。死亡のケースも増えています。子どもたちは、何も悪くないのになぜ、このようなことが起こってしまうのだろう、なぜ、未然に防ぐことができないのだろうと憤りを感じます。早くこのようなことがなくなるようと強く思うのと共に、私にできることがあれば積極的に参加していきたいと思います。

今までの経験から、保育士はとても大変な職業なのだと身に染みて感じました。子どもたちの命を預かる仕事で、子どもたちの最初の先生である。こんなに責任が大きい職業だと私は、思つていませんでした。今の私は、自分のことろくにできていなく、改善していかなくてはいけない点が多くあります。ですが、これからも子どもたちの力になれるようになると、いう気持ちを忘れないで、夢に向かって頑張っていきたいと思います。



ものをつくること

東京都立科学技術高等学校 二年

伊 橋 春 佳

私が入学した科学技術高校には、普通科の高校にはない機械がたくさんあります。レーザー加工機、DNAシーケンサー、走査型顕微鏡など、入学するまでは見たことも聞いたこともなかつた機械が多いです。その中でも、私が一番興味を持ったのは、レーザー加工機です。

科学技術基礎の実習で「デジタル時計製作」を行ったとき、私は初めてレーザー加工機を使いました。「デジタル時計製作」の実習では、フレームをデザインしてレーザー加工機で切り、基板を作つてはんだづけをし、最後に作つた部品を組み立てるという、ものづくりの技術の基本をたくさん学びました。レーザーの性質や起源などの説明が終わると、いよいよ実習が始まりました。最初に先生から手渡されたものは、何とかかれていない真っ白い紙でした。先生は、その紙に130ミリ×180ミリの大きさで好きな絵を描いてこいと言いました。私は驚きました。この何もかかれていない白い紙に描いた絵が、そのままデジタル時計のフレームのデザインになるなんて、一体これからどんな実習が始まらるのだろうと、とても楽しみになりました。

私が、その紙にブタの絵を描くと、先生は、大きなアクリル板から皆のデザインしたフレームを切り抜くから、デザイン

した絵が一枚の板となつたときに変にならないように工夫しました。それは、私が初めに描いたデザインでいえば、ブタの鼻の部分を工夫しろということでした。私が、紙に描いたブタの鼻は、少し大きな楕円の中に小さな丸が二つ並んでいました。そのまま大きなアクリル板からこのブタの絵を切り抜けば、結局大きいほうの楕円を切り抜くのと同じになつて、鼻のところに大きな穴が一つ空いただけのデザインになつてしまふということでした。

この説明を受けたあたりから、だんだんデザインを考えることの意味や重要性がわかつてきました。そして、レーザーで「切り抜く」ということのイメージができてきました。そこで、それを切り抜いたときに皆がブタだと認識できるように、デザインを考え直しました。

その後「Gコード君」というソフトを使って、ブタの絵の座標をパソコンに打ち込みました。私は、レーザーで切り抜くのにどうしてパソコンに座標を打ち込まなければいけないのか、そのときは全くわかりませんでした。訳もわからず言われるがまま、切り抜く順番に番号を決めて、座標とプログラムを打ち込みました。「プログラム」という言葉は何度も聞いたことがありますでしたが、まさか人生の中で自分がプログラムを組むことがあるなんて考えたこともなかつたので、不思議な感じがしました。プログラムを打ち込み終わつたら、データを保存して「レーザー加工機」がある部屋に移動しました。その機械を見た瞬間、その大きさに驚いたとともに、疑問に思つていたことが解決しました。なぜなら、レーザー加工機にはパソコンのようなものと、画面と、たくさんボタン

が備え付けられていたからです。保存したデータをこのコンピューターに転送すると、レーザー加工機がプログラム通りに切り抜いてくれるのだとそこでやつと理解しました。そしてレーザー加工機は思った通り、打ち込まれたプログラムにて、私が紙に描いたブタの絵と全く同じものを切り抜いてくれました。近くにいた友人が切り抜かれたブタを見て、可愛いと言つてくれたことがとても嬉しくて、さらに達成感が増しました。切り抜かれたフレームの断面はとても美しかったです。

完成したデジタル時計を見たとき、正直、一から自分で作ったとは思えない出来栄えでした。私は、時計がブタの形のフレームの中で一秒一秒時間を刻んでいるのを見ると、いつも嬉しくなります。

私が、この「デジタル時計製作」の実習で学んだことはたくさんあります。中でも一番大切だと思ったことは、ものを作るとときに重要なのは見た目だけではないということです。壊れにくさや加工の手順、使いやすさなど、色々なことを考えて作らなければいけないのです。私たちの身の周りにはものがあふれていますが、その一つひとつにデザインがあつて、その一つひとつを考えた人がいます。それは当たり前のこのようで実はとてもすごいことなのだと、この実習を通して気付きました。ものを作る人がいるから、私たちの生活がより豊かになつてているということ、科学技術基礎の実習でものづくりをするまで気付いていなかつたことを、今はもつたいなかつたと感じています。もつと早く気付いていれば、自分の周りにあるものが、どうしてそういう形になつたのか、興

味を持つたり、疑問を抱いたりして、その謎が実習でものづくりを体験することで解けるという楽しみを、もつと早く味わえたのにと思うからです。

私は「デジタル時計製作」を通して、ものづくりの楽しさとデザインすることの奥深さを知りました。世の中にはまだ、見た目ばかりを重視したものや、使い捨てのものがたくさんあります。私は、そんな時代に生きているからこそ、使う人を想い、見た目や機能性だけではなく人を元気づけたり、楽しませたりできるものを作る仕事に関わっていきたいと考えています。

生命の輝きを支え続ける

東京都立科学技術高等学校 三年
染 谷 美 月

私は小さい頃から身の回りの物に対して「どうして」「何故」と疑問を持つことが多かった。特に生物や人間にに対する興味が強かつた。こうした勉強を専門的に学びたいと考え、私は科学技術高校の化学環境分野に進んだ。私達の身のまわりに存在する様々な微生物のことや、化学分析など専門的なことを学んで来たが、一年生の頃の私は「白衣を着て働くような職業に就きたい」とぼんやりとしか将来の夢について考えていなかつた。

私の高校の最大の魅力といえば、二年生の終わりから三年生の夏にかけての半年間行う課題研究の授業だ。様々なテーマに分かれ、少人数のグループで研究を行う。私は、とある漫画の影響から「天然ペニシリンの精製」というテーマを設定し、班長として青カビから抗生物質を作る研究をすることにした。どこにでもいる菌から薬が作れるなんて魔法のようだと思った。将来誰かの役に立つ仕事がしたいと考えていた私は、これが本当に可能なのか調べたかったのだ。だが、現実はそう甘くなかった。思い通りにいかないデータや班員同士の関係、複雑な論理の勉強に私の心は折れかけていた。とうとう研究に息詰まり、私は研究担当の先生に相談した。先生は、「何でも自分一人でやろうとしては駄目。せっかく仲間がいるのだからた助け合なきや。」と言った。そうだ、班員達は研究の仕方がわからないだけで、やりたくない訳ではない。私が責任を持って適切な指示を出してあげればいいのだ。また、班長は班員の士気を上げてあげるのも大切な役目だ。班員の協力が無ければ元も子もない。それから班員同士で協力することも増え、それに伴って予想したデータや結果を生み出すことができた。そして、他の先生方からも高い評価を得ることができたのだ。研究もひと段落した頃、担当の先生に「三年生だけど、進路はどうするの?」と聞かれた。「人と関わって誰かの役に立ちたい。」私にはそんな抽象的な考えしかなかったが、それを聞いた先生はホームヘルパー2級という資格の取得を奨めてくれた。

毎週土曜、日曜の8時間。三ヶ月にも及ぶその実習は、学校の勉強と両立しなければならないのでハードであつたが、

楽しかった。「最後は自宅で過ごしたい。」死期が迫りいよいよよとなるとそう考える利用者は多い。ホームヘルパーの講習はそんな利用者の心理から学んでいった。ホームヘルパーの講習が中盤に差し掛かった頃、理学療法士という職業を知つた。事故や病気で動きにくくなつた身体を動くようにするために医師の指導の下、リハビリテーションを行う職業だ。この仕事は、私が今まで学んで来た生物学の知識や柔道部に所属していたことで学んだボディメカニクスが最大限に發揮できると思った。「理学療法士として医療に携わりたい。」そう強く思った。理学療法士について調べていくうちに、理学療法士になるには大学へ進学するよりも専門学校に通つた方が私にとって最適であるとわかつた。しかし、「理学療法士の専門学校に進みたい。」と両親や担任の先生に言うと「専門学校にはいつでも入れるのだからもつとよく考えて大学に進むべきではないか。」と言われたのだつた。私は酷く落胆した。しかし私の気持ちは変わらなかつた。専門学科の良さは両親や担任の先生よりも私の方がよく知つていて思つたからだ。

今私が専門学科の高校に進んで良かつたと心から思つてゐる。苦労して行つた課題研究を通して、仲間との協力の大切さ、周りのサポートの有難さを知ることができた。これは専門学科の高校だつたから学べたことだ。だからこそ、私は学歴よりも学習の質で学校を選びたかった。そして、ある学校に出会つた。その学校の方針に「生命の輝きを支え続ける理学療法士」という言葉がある。私はその言葉に強く惹かれ、第一志望に決めた。両親や担任の先生の説得を再度試みると、私の強い意志からかその学校を受験することを承諾してくれた。

そして私は先日、見事その学校に合格したのだ。

怪我や病気で入院している方は一刻でも早く自宅に帰りたい、健康な身体に戻つて生活を楽しみたいと思う。その想いに応えたり、引き出したりするのが理学療法士の仕事である。身体と心を支えるとてもやりがいのある職業だ。介護福祉士の先生に「理学療法士はどんな職業だと思いますか。」と聞くと、その先生は「理学療法士はずつと私の憧れで、介護の世界では医者と相談し、適切なリハビリを施すのに必要不可欠の人だよ。」と教えてくれた。その先生は私にとって、とても尊敬する方であり、先生が憧れと言つた理学療法士という職業はこの上なく誇らしい職業なのだと感じた。この講習で学ぶうちに、年配の方は例え介護が必要な生活をしていても決して弱い存在なのではない、私たちよりもずっと多くの体験をし、知恵を持つていても最期が孤独であつたらこれほど尊い存在なのだということを知つた。これまでの人生がどんなに幸せな人生を送つていても最期が孤独であつたらこれほど悲しいことはないだろう。介護福祉士は利用者さんが「幸せな人生だった。」と思つてくれるよう努めるのだと教えてくれた。ホームヘルパーや介護福祉士が最後の生命を輝かせる職業なのだとしたら、理学療法士は今ある生命の輝きを支え続けていく職業なのだと思った。

私は、春から憧れの理学療法士になる為に専門学校に通う。将来の夢を叶えるスタートラインに立てたことを、とても誇りに思う。これまで高校で学んだ実験や実習での体験、そこで学んだ仲間との協力の大切さ、相手を思いやる気持ちを活かし、いつまでも高い志を持ち続けられるような理学療法

士になりたい。そして、今まで出会ってきた方や、大切な家族、これから出会う人々の力になりたい。

人を良くする食について

東京都立農産高等学校 二年

井 筒 貴 子

食という字は人を良くする、と書きます。

私は農産高校に入つてから、実習で初めて野菜を育てました。野菜を育てるということは思つていた以上に大変なことでした。が、自分で育てた野菜は市販のものよりも甘味を強く感じ、自分で育てたのだという誇らしさを感じました。それと同時に、農作物を生産するという事はとても大切なことなのだと学びました。作物を育てる事の難しさや出来た時の達成感、売れた時の嬉しさを感じました。それによつて生産者の気持ちや立場を考えられるようになりました。消費者の視点だけでなく生産者の視点で考えられるようになり、視野が広がつたと思います。これは、農産高校に入学したからこそ、感じ取れたことだと思います。

そうして作物を生産し、食品について学んでいる矢先に東北地方で起きた大きな地震が、津波という大変な二次災害を起こしました。地震と津波によって原子力発電所が被害を受け放射能がもれてしまうという大変な事態にまでなりました。

その放射能の影響は農産物や飲料水、海産物にまでおよびました。福島県産のホウレンソウなどで基準値を超えた放射能が測定されたため、出荷停止になるなどの報道を聞いていて、「農家はとても悔しいだろうな」と思いました。通常よりも大幅に値段を落とされた被災地の野菜を見て、遣る瀬無さを感じました。市場にすら出回らず廃棄される野菜もあり、農家には大打撃です。妥協をせず、心をこめて育てたものが売れない、食べてもらえないというのは悔しいだろうと思います。

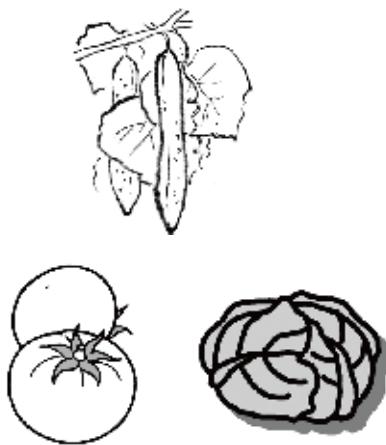
日本は元々、先進国の中でも食料自給率の低い国です。しかし、私は普段そのことをあまり実感したことはありませんでした。スーパーなどには食料があふれ返り、食料に困つてしまふということはなかつたからです。そんな状態で、日本は食料自給率が低い、と聞いてもピンときませんでした。そんな私は今回の震災でそのことに危機感を抱かなくてはいけないのでないかと考えるようになりました。

一般的に、国内産のものは品質は良いが値段が高い、というイメージがあります。実際にそういったものが多いでしょう。それに比べて外国産のものは、品質は国内産に劣るかも知れないが、とにかく国内産のものよりも安い、というイメージです。その場合、品質は不確かでも、安い外国産の方がいい、と考える人が多いのが現状です。

震災後、出荷停止になる国産のものもあり、流通も色々な所でストップした為、外国産のものが増えたように感じました。ただでさえ外国産のものを買い求めるの方が多いなかで外国産のものが増え、今よりも国内自給率が低くなつても

私たちには危機感を持たない。それでは国内の第一次産業が機能しなくなってしまいます。農産高校に通うひとりとしてそれは防がなければならない事態です。

ただし、今回ることは普段産地を気にせずに安さばかりを求める人々が、産地をチェックするようになるチャンスかもしれません。国内の第一次産業の役割や未来について関心の無かつた人々が、真剣に日本の農業や漁業の未来を考えてくれるかもしれません。そうなった時に、食について学んだ私たちの知識は役に立つと思います。家族や友人に伝えることも出来ます。私たちが農産高校で学んでいることは、周りの人や食文化の助けになるようなことだと思います。文化祭や地域販売などで、一生懸命作った生産品を通して農業や食品について伝えるということで、一人でも多くの人の胸に届いて関心を持つてもらうことができれば、何かが変わると思います。食についての知識は、豊かな消費者を育てるのではないかと、私はそう思います。



農産高校に入学して

東京都立農産高等学校 一年

小川 恭祐

僕は小さい頃から食品製造に興味をもっていました。それは、祖父母が豆腐店を営んでおり、豆腐の製造過程を見てきたからです。大豆から豆腐がつくられるまでには何工程もあり、朝は五時くらいから仕事を始めます。豆腐づくりにはお湯が使えないのに、特に冬場は手が冷たくて厳しいと祖父は言います。何十年もこの仕事をしているので祖父の手のひらは皮が厚く、僕にとつては祖父の手が「職人の手」だと言えます。製造している製品の種類は、絹豆腐・木綿豆腐・油揚げ・厚揚げ・がんもどきです。祖父は豆腐の味にこだわっているので、大豆は国産のものを使い豆腐本来の味を生かすため、製造方法を昔からずつと変えずに豆腐を製造しています。そのためお客様から「大豆の味が濃くておいしい」となどと言われています。祖父はお客様に喜んでもらえることがうれしいと言つていました。朝早くから作つていて大変だと思いますがその分やりがいもあり、祖父は七十七歳ですが仕事を続けています。そんな中で僕も人に喜んでもらえるような仕事をしたいと思うようになりました。

高校受験にあたつて、志望校を決めるときに、農産高校を見学しにいきました。実習でマドレーヌや肉味噌を製造している様子を見て食品製造を幅広く学びたいと思い、農産高校

に入学しました。農産高校には総合実習という科目があります。週に一日4時間目から6時間目まで通して集中して実習や実験ができるとても充実した授業です。一年生では、3つの分野を学んでいます。この一学期、僕は、穀類加工ではクッキーとコッペパンの製造、園芸加工ではガスバーナーの使い方と計測器具の使用法の実習を経験しました。穀類加工では、まず小麦粉に薄力粉と強力粉があり、粉の種類によって用途が違うことなどを学びました。初めての実習で作ったクッキーでは、型抜きと絞りのクッキーを作りました。油脂についても、ショートニングを入れたり入れなかりすることで質感がかなり異なり、様々な原料の組み合わせや製造工程によつてクッキーにもいろいろな作り方や種類があることを知りました。コッペパンの製造では原料を手で混ぜ、手ごねの作業では力の入れ方やその加減が難しく、成形の作業でも形を整えるのに苦労し大変でした。今まで食べてたパンとは少し違つて弾力が強く、形は様々でしたが、手作り感があるおいしいパンができました。園芸加工では今まで一度も作ったことのないイチゴジャムとパインアップルの缶詰を製造しました。初めて知ることばかりでした。イチゴジャムの製造ではひとつ一つ丁寧にへたを取り除き、できるだけイチゴ本来の味や色を残すためシンプルな配合で作りました。瓶詰めの工程では、瓶の殺菌をするなど衛生管理も学びました。パインアップルとシラップを缶詰にして加熱殺菌後、2～3ヶ月置くことで、しっかりとシラップ漬けになつてから初めて完成品に

なるということを学びました。基礎実験では、器具を覚えた溶液を一人で調整するところから学びました。一度も使つたことのない実験器具がたくさんあり、その中でも基本となるピペットが三種類もあつたので、使い方を覚えたりするのがとても大変でした。ガラスの溶ける温度、ガラス器具の洗い方、試薬の計量方法など普段あまり体験しないことを、まだ基礎の段階ですが授業で学ぶことが出来ました。専門的な用語は難しいけれど、ここでしつかり基礎的な技術を身につけ、食品の成分の分析などもできるようになりたいです。

農産高校に入学してまだ半年ですが、食品製造に関わるようになって普段の生活でも、何気なく口にしている食品について深く考えるようになりました。例えば朝食に食べているパンにもそれを使われている材料が違っています。製品の表示を見て原材料を確認し、自分が作ったコッペパンと味を比べてみると自分が増えました。工場で大量生産されているパンよりも小規模な店で作られているパンの方が自分たちが作ったパンと似てていると思います。パンにつけるジャムも、自分が作ったジャムはすりジャムだったのに対し、購入したジャムはプレザーブスタイルのものである等と発見もあり、食感や味の違いを感じることができました。

将来は食品製造の仕事に就きたいという気持ちは、自分でだんだん強く、具体的になつてきています。今は、パン屋の経営に興味が出てきました。学校では、まだまだ二学年、三学年になるにつれて、醸造分野・畜産加工分野・応用微生物の実験など幅広く深く学習ができます。来年は、特に文化祭で地元の人々に大変人気のある味噌を製造する醸造分野の実

習があるので楽しみにしています。農産高校で食品に関する基本的な知識をしつかり学び、食生活アドバイザーなどの食品関連の資格取得も目指し、自分の夢の実現のために高校生活を充実させていきたいと思います。

高校三年間で学び、

今後活かしたいこと

東京都立農産高等学校 三年

田邊智美

私は農産高校に入学し、農業に関する知識や技術を学習した。植物や動物とは一体どういった生態であるかを学び、その生き物たちの命の尊さを改めて知った。

高校一年生の六月に私は「三宅島緑化プロジェクト」に参加をした。私は当初、ちょっととした旅行気分で参加をした。

しかし、いざ三宅島に上陸してみると鼻につくような硫黄の臭いがたち込んでいた。三宅島は二〇〇〇年に島の中心部の雄山が噴火をし、今でも噴火し続けている。火山ガスによって木々が島から無くなつたのである。降り続く火山灰によつて木々が埋没したものやマグマに流された木々もあると聞いた。一刻も早く緑が増えるように木の苗を植えた。酸性に強いツバキやサカキを急な山の斜面に登り重いスコップで穴を掘り木の苗を植えた。三宅島はまさに生きている島であった。

そのことを感じ、当初の気持ちで來ていた自分が情けなく思

えた。しかし三宅島の人たちや林業関係者の話を聴いて彼らと同じ様に三宅島を愛しく思えた。彼らは三宅島をとても愛していて三宅島の話をするとき島に対する愛情が伝わり私は感動した。そして私の「農業」「林業」の偏見や価値観が変化していった。

同じ年の夏休みに私は北海道の酪農家へ三週間、ファームステイを行つた。生まれて初めて搾乳や牛舎掃除を行つた。朝食を食べる前に牛の世話をし汗をかくと朝食がとても美味しく感じた。また生まれてくる新しい命にも感動した。出産には立ち会うことは出来なかつたが、生まれたばかりの子牛は瞳が澄み、生きる気力に満ち溢れておりとても愛しかつた。しかし生まれる前から乳牛ではなく肉牛として生まれ処分される牛もいるという現実も知つた。そのことを聞いて、「何故私達は平然と肉や野菜を食べていられるのだろうか」「生命を食べるとは一体何だ」とたくさんの疑問が湧いてきた。だが私達は食べていいかなければ生きていけない。だから日本人のよく口にする言葉「いただきます」「どちらさま」を言うのだと思う。この言葉を言えばどれだけの生命に感謝の気持ちが伝わるのだろうか。私達は生命の育成や栽培をしている人々へも感謝しなければならない。そして食べることに感謝の気持ちを込めて食べるべきだと思つた。

このことに気付いた頃からは私は学校の実習授業にやりがいを見い出すことができた。

「農業」「畜産業」の偏見なんて無くなり、寧ろ私は将来、安全かつ安心して食べられる野菜を提供しおいしく食べてもらいたいと思うようになつた。

翌年の夏休みに群馬の農業生産法人でインターンシップを二週間行つた。さまざまな人が働いていた。仕事にやりがいを感じ真面目に働いている人や毎日取り引き先へ電話をしている人もいた。しかし仕事に不満を持つ人もいたが、どの社員の人も毎日立派に働いていた。私が一番仕事をしていて輝いていると感じた人がいる。農場で働く若い女性社員である。

同性だからかそれとも同じ農業系高校出身だからか、私は彼女に強い憧れを感じた。彼女は自分の仕事に誇りを持ち、毎日笑顔で出勤していた。ホウレンソウやコマツナの管理を会社から任せられていた。「毎日がぐるぐる回るくらい忙しいが、とても楽しくやりがいのある仕事」と彼女は言っていた。その言葉を笑顔で言う彼女に私は感動し、私の将来の理想像になつた。「私もいつか愛情を込めた野菜を作りたい」と心から思つた。

三宅島、北海道酪農体験、群馬の農業生産法人のインターンシップを経験した今、私は素晴らしい体験に参加できたことに本当に良かったと思つてゐる。「農業とはいかに素晴らしいか」「食べ物が貴重な理由」そして、「生産者の意地と信念」が分かつた私は将来日本の農業生産自給率を上げることをしたい。その為には自分自身が農業に没頭し真摯に受け止め、新しい農業の担い手として農業を行いたい。農業は辛くて汚いが、とても楽しくやりがいのある仕事であるということを多くの人々に知つてもらいたい。そして私が生産者になつたら「いただきます」「おいしかった」「ごちそうさま」がいつまでも聞こえることが出来る安心で安全な野菜を作りたい。

私が農業高校の都市園芸科に入学して一年と六ヶ月。最初は慣れない作業ばかりで苦労しましたが、実習を通して教室で教科書を使ってノートに書くだけという授業では学べないことをたくさん学べました。作物も生き物なのでそれぞれに特性があり、栽培するうえで難しいところもたくさんあります。しかし、雑草を取つてあげたり、肥料を施してあげたりといろいろ手をかけると作物はより大きく成長して、私達に応えてくれます。上手く育つと苦労したかいがあったなど、とても充実感があるものです。

私が今までやつてきた実習の中で一番印象に残つているのは、販売実習です。私はこの実習からたくさんのこと学びました。まず、販売する前に収穫をします。作物を収穫するのは、いろいろある実習の中で一番達成感があり、感動も大きなものです。特に自分達が実習で栽培や管理をしたことがある作物だと、「大変だつたけど頑張つて真面目に実習に取り組んでよかったです」と、感動もひとしおです。さらに果樹だと、販売する果物をまず試食して、その感想を買いにきた人に伝えなくてはなりません。

いざ販売実習になると、会計や袋詰めなどで手一杯でせつかく地域の人と交流できるチャンスなのに、会話もほとんど

つ な が り

東京都立農業高等学校 二年
城 定 春 奈

できずについとうまに販売実習は終わってしまいます。でも、会計や袋詰めのときに「いつも並んで、ここでの野菜を買つてますよ。」とか「こんな立派なのが育てられるなんて、すごいわね。」とか、たくさんの方々に声をかけてもらえてとても嬉しいります。そして普通の高校だつたら絶対にこういう体験はできない、農業高校に入学して本当によかつたなと思うのです。

この販売実習を通して、私は人ととのつながりがとても大切なことに気付きました。例えば、こうして学校の作物が地域の人々に届くまでにはたくさんの人々の手を経ています。作物の種をまき、栽培して収穫し販売するのは私達です。さらに遡ると、種を選んで注文する先生方、馬糞を提供してくれる競馬場の方々、さらには先生方が注文した種や肥料を運送する人、その種を農家のなどにニーズに合わせて、より栽培しやすく、病害虫に強く、収量が増えるよう品種改良する人など、数えきれないほどの人々がつながつてお互いのため日々頑張っているのです。数えきれないほどのたくさんの人がつながつているので、当然、顔も名前も知らない人がたくさんいます。しかし、その人達のおかげで私達は農業高校でいろいろな実習をし、最終的に販売実習を通して地域の人々に学校で栽培した作物を売つて、買ってもらうという新たなつながりを築いていくことができます。

私はこの販売実習を通して、私を支えてくれている親や先生方、地域の方々に感謝し、もっと一生懸命実習に取り組もうという気持ちになりました。人ととのつながりや信頼関係の大切さを、私は販売実習を通して学んだのです。

私が将来、農業関係の仕事をしていくかはまだ分かりません。でも、農業でなくても、人と人のつながりは社会にたくさんあります。たとえ農業に全く関係ない会社に就職しても、必ず多くの人と関わり、つながっていくことになるでしょう。私はこれから先、人との関わりを大切にして生きていきたいと思います。当たり前のことですが、多くの人と関わって、少しあはその人たちの力や助けになれたらしいなと思います。



表彰風景

専修学校の部 優秀賞

ものづくりに関する考え方

青山製図専門学校 一年

大瀬智公

私は小学生の頃、毎年夏休みが、待ち遠しくて仕方がありませんでした。夏が来るたびに、自分のお小遣いや母親にお願いをして材料を用意してもらい、自由工作で作品を作つていきました。私が、ものづくりに興味を持ち始めたきっかけでもある夏休みが、高校卒業後の進路に大いに影響を及ぼしています。

高校二年生の頃、担任の先生に「社会に出て何をやりたいのか、どの分野について深く勉強をしたいのか」と聞かれた時に、頭に浮かんできたのは製図でした。私は、特に建築の分野に強く興味を抱いていました。工業高校にいた私は、二年生の時に製図の授業があり、この授業を通して、ものづくりの新しい一面に出会う事ができました。そして、図面を描く楽しさを知る事ができました。また三年生の時の実習作品の発表会で、家の図面とその模型を見た事で「製図」特に建築製図に強く興味を持ちました。

進路担当の先生に相談をして、自分で調べて決めたのが、青山製図専門学校でした。すぐに学校説明会に足を運び、先生の話を聞き体験授業を受けて、先輩の作品を見たとき、「私

も先輩方のような作品を作りたい」「もっと詳しく勉強したい」と思い、高校卒業後に建築分野を選ぶ決意をしました。勿論大学でも勉強は出来ますが、専門学校では大学よりも、より実践的に学べると感じました。勿論建築に関しての知識は必要だと思います。しかし、知識だけでは社会に通用しないと家族にも言われ、また、自分でも感じていました。その結果、専門学校への入学を選びました。

今年の四月から専門学校で建築についての勉強が始まりました。授業が始まつてからの毎日が楽しくて仕方ありません。一つ一つの授業で新しい知識を得る事が出来て、毎週の実技の授業などで色々と気が付かれる点が多くあります。勿論、簡単なものばかりではありません。楽しいという気持ちだけで毎日が過ごせるわけでもありません。それでも高校の頃よりはるかに学校という学びの場所が好きになつてきました。

建築史の勉強を通して、過去の建築家の背景や作品の事、様々な様式などを知る事が出来ます。今後、建築を学ぶ上で知識として知つておくべきだと実感する事ができました。また、建築設備では設備の名称や種類、使用目的を細かく説明してもらい、身近にある設備について学ぶ事ができました。一般構造では、木材の種類や加工品について知識や木造の部分名称や長所や短所、小屋組みや床組みなどの木造に関する事を学ぶ事ができました。

今までの授業を通して、私の中でものづくりの観念に変化がありました。専門学校に入學する前、私のものづくりの重点は作る工程にありました。しかし、今では、作る工程だけではなく、考案の工程からものづくりに含まれているという

事を知りました。また、作り始める前の段階がとても大事であると言う事です。考える段階からしっかりとしなければまともな作品は作れません。また、その考えを他の人にきちんと伝えなければ、それは意味のないことだと思いました。一人では作り上げる事が出来ない作品もあります。自分の考えを完全に近い形で、どれだけ他人に伝える事が出来るかは、チームで仕事をする上で、とても大事で必要な力だと思います。

自分の考えをしっかりと相手に伝える事ができる図面を描けるように、今後の授業を頑張っていきたいと思います。そして、ひとつのか考に囚われずに、色々な観点からものづくりという世界を勉強したい、そしてもつと自分の中のものづくりの世界を広げていきたいと思います。

しかし、図面に関する知識や、計算力が必要とされる仕事である為、数学が苦手な私は両親からCAD技術者を目指すことを反対されました。私自身も、普通科の高校から進学するのでは遅いのではないか、本当に就職できるのだろうか、という不安はありました。CADの勉強がしたいという思いが強く、少々強引に両親を説得して専門学校への進学を決めました。

しかし、図面に関する知識や、計算力が必要とされる仕事である為、数学が苦手な私は両親からCAD技術者を目指すことを反対されました。私自身も、普通科の高校から進学するのでは遅いのではないか、本当に就職できるのだろうか、という不安はありました。CADの勉強がしたいという思いが強く、少々強引に両親を説得して専門学校への進学を決めました。

入学後、手描きの製図からCADソフトを使っての製図、数学や材料力学など様々な授業を受けました。今まで聞いたことのない難しい言葉ばかりで戸惑うこともあります。しかし自分でやると決めたことをしっかりとやり遂げるため、少しくらい体調が悪いときや悪天候のときも休まずに学校に通っています。それと同時に、ただCAD技術者を目指すといふのではなく、どのような職場で仕事がしたいのか、何を目標に就職するのかなどを考えるようになりました。私が思っていた以上に、CADを必要としている企業は多くあります。たが、その中で私は建築関係の職場で働きたいと思うようになりました。その理由は、以前建築の現場で働いていた父か

私の進路・将来の夢

中央工学校 一年
宮 岡 沙 貴

私の将来の夢は、建築関係の企業に就職し、CAD技術者として活躍することです。

私がCAD技術者を目指し始めたのは、高校二年生の頃でした。当時やりたいことが見つからず、進路に悩んでいたとき、インターネットのホームページでCADを知りました。設計者の描いた手描きの図面をコンピュータで描くということ

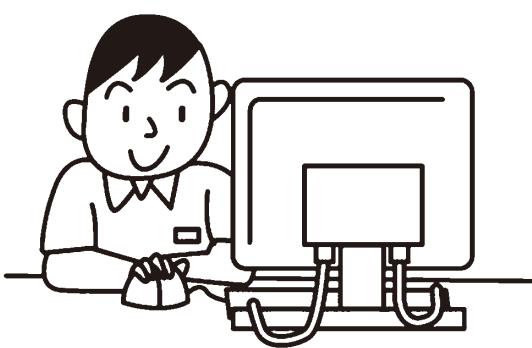
ら仕事の話を聞き、関心を抱いていたこと、建物の構造に興味があり、家の造りを見るのが好きだということです。将来、色々な建築物に携わるCAD技術者になることが私の目指す夢です。

就職するということは、働いて収入を得ることであり、そこには多くの責任が伴います。私の選んだCAD技術者という仕事においては、設計者の意図を正確に読み取りデータ化すること、些細な点まで忠実に作業すること、決められた納期を守ることなどが非常に重要です。熟練したCAD技術者になるには、たくさんの時間と経験を要すると思います。私は、自分に与えられた目の前の仕事を全力でこなし、着実に現場で即戦力のあるCAD技術者になれるよう努力したいと思います。

仕事をする最大の目的は生きていく上で必要な収入を得ることであり、私の就職という夢を叶えた先にあるのは、安定した収入を得て家庭を持つこと、反対しつつも進学を許してくれた両親に親孝行することです。そのためにも仕事で得た報酬は大切なもののひとつです。しかし、仕事による報酬は決して収入を得ることだけではなく、ものを造る感動や自分自身の向上、仲間と分かち合う達成感などたくさんあります。私はそのひとつひとつに喜びを感じながら、この仕事をしたいと思います。

この夢を実現するために今私がやらなくてはならないことは、学校での授業や経験を大切にすること、人に伝え、人から感じ取るコミュニケーション力を身に着けることです。課題を迅速に且つ正確に仕上げることが職場での仕事の成果に

つながり、日頃の人への気遣いや接し方が円滑な人間関係を築く力になるとと思います。普段の生活の場においても就職を意識した言動を心掛け、一人の社会人として自立していくための訓練をしてゆきたいと思います。そして自分の目指す立派なCAD技術者になれるよう、日々精進したいと思います。



専修学校の部 佳作

実習から学んだこと

国際デュアルビジネス専門学校 一年

伊神高志

人は皆いつでも学びながら生きているので生涯学生であるかもしれません。分からなかつたことを覚え、それが出来るようになつても、わからぬことや知らない事は次々と出てきます。それもまた一つ一つ乗り越えていく、そういう経験を通して人は学生から一人前の社会人へと成長していくのだと思います。

このようなことを思うようになったのは、企業実習を通して、社会人とは何か、仕事とは何かということを考えるようになりましたからです。

学生と社会人の違いについて思うのは、学生は学費を払つて多くのを学んでいる途上にある立場であり、社会人は給料を貰つて働いているプロフェッショナルということであります。私は現在専門学校でホテルの事を学べる学科で授業を受け、企業実習も同時に行ひ、学んでいます。学校ではホテルの専門知識や実務、サービス、おもてなしについて一つ一つ教えてくれます。例えば、私の不得意な英語についても文法からコミュニケーションスタイル、英語独特的の表現まで丁寧に教えてくれます。また一般的には学ぶというイメージはないか

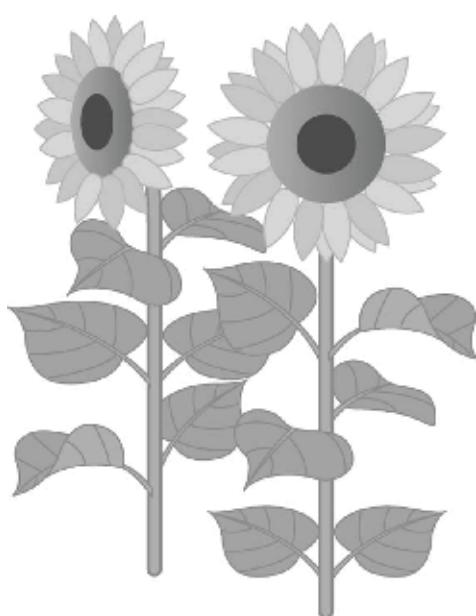
も知れないバー・テンダー・フロントという職種についても学校では概要から実務まで座学と演習を通して学ぶ事ができます。

それでは社会人はどうでしようか。私は企業実習を通して働くことや社会人とはどういうものかについて深く考へるようになりました。組織の一員として働いたり、現場でお客様の対応をするということが学生の勉強と明らかに異なるのは、学校のように一から十まで懇切丁寧に教えてくれないという事です。そして、そこに仕事を学ぶにも行うにも責任が伴うということであります。学校のように丁寧に時間をかけて教えないのは職場は学校ではないことは当然ですが、従業員が力を入れるべきベクトルがお客様であり、お客様が最優先されるからです。そのため現場で働く最低限のことは最初のうちに教えてもらえて、あとは自分で何とかしなければなりません。お客様に対して粗相をしてしまつても自分の責任であり、それにに対するスキルや知識を持ち合わせていなかつたのも自分の責任、それを上司や同僚に聞かなかつたことも自分の責任なのです。

私が責任感を感じたことの一つに言葉づかいを注意されたことがあります。私は普段から言葉遣いには気を遣つてゐるつもりでした。実習もホテルの中に入ればそこにはお客様がいらっしゃり、しっかりと対応せねばならないという思いからより一層言葉づかいに気を付けていました。しかしながら実習を始めてしばらくして、私の言葉づかいでお客様に不快な思いをさせてしまつたり、それを聞いていたマネージャーから注意をうけたりしてしまいました。「(私が)なさいます

かという言葉は日本語にはない。いたしますかと言ひなさい。直しなさい。」「ほうは方角を表すときにしか使わない。それが癖であれば直しなさい。」と言われました。家族、親類、友人であればその場では許される言葉遣いも、仕事としては許されないので思いました。それは私という人間であること以上に、私は会社の一員であり、お客様は私をその会社の対応ということで見るため言葉づかいからその対応まで責任が伴うのだと学びました。

社会人となり仕事をするということは、何をするにしても会社の一員として名前を背負い対応するため責任が伴うということを実習を通して感じ、それが学生との何よりの違いだと感じました。髪型や服装、自分の時間の使い方や立ち居振る舞いも学生であれば学業という本分を全うしていればそこまで問われることもありません。しかしながら、会社はそうはいきません。何に取り組むにしても自分から積極的にかかわっていかなければ仕事も円滑に回すこともできず、お客様に対しご満足いただけるおもてなしをすることもできません。取り組んだ事には最後まで悩み、最後まで解決し、責任を全うすることが重要です。時に寝坊をしてしまったりと、まだまだ私にはしっかりとしていない部分がありますが、一つ一つの事に責任をもつて取り組んでいき、一人前の社会人となることが私のこれから目標です。その目標に向かって実習で多くを学びながら、学生のうちに知識やスキルなどを身に付けて社会人への準備もしっかりといていきたいと思います。最後にこれらの経験や学んだことを通して私がどのような社会人になつていきたいかを書きたいと思います。



実習では学ぶこと、厳しいことも多く時に気持ちが折れそうになることもあります。しかしながら自分が責任をもつて取り組んだことに對し、お客様が喜んでくれることが何よりも自分の喜びとなります。どうしたらお客様に喜んでいただけるだろうか、そういうことを実習を通して非常によく考えるようになりました。今ではお客様の名前を覚え、とびきりの笑顔と明るくはきはきとした声で対応することを心がけています。学校や実習先で学んだことを生かし、责任感を持った仕事に臨み、お客様も現場の皆様も私自身も笑顔でいられるように取り組み、日々の仕事を頑張っていきたいと思っています。学業と社会人（仕事）の両立は大変ですが、そのビジョンの実現に向かって、一生懸命勉強し、実習で多くの経験を積み、悔いのない学生生活を送りたいと思います。

平成23年度「作文コンクール」応募校一覧 (含:応募人数・入選者数)

東京都産業教育振興会

(中学校の部)

番号	区・市名	学校名	応募人数	入選人数
1		愛國	5	2
2	千代田区	神田一橋	2	1
3	中央区	晴海	5	1
4	新宿区	落合	1	
5		新宿西戸山	8	
6	文京区	第六	8	
7	台東区	都立白鷗高等学校附属	10	3
8	墨田区	立花	2	1
9		両国	4	
10		吾嬬第一	1	
11	目黒区	第八	7	1
12	大田区	大森第六	1	
13		馬込	6	
14		南六郷	6	1
15	世田谷区	喜多見	2	
16	杉並区	井草	10	
17	中野区	第七	10	
18		緑野	2	
19	北区	十条富士見	4	2
20		浮間	1	
21	板橋区	第一	1	
22	練馬区	大泉北	1	1
23		上石神井	10	
24		谷原	2	
25		都立大泉高等学校附属	10	4
26	足立区	新田	10	1
27	葛飾区	葛美	1	
28		東金町	3	
29		堀切	8	3
30	江戸川区	葛西	6	
31		小岩第四	1	
32		小松川第二	4	
33	調布市	第六	2	
34	武蔵野市	都立武蔵高等学校附属	1	1
	34校	計	155	22

入選校数 13校

(高等学校の部)

番号	学校名	応募人数	入選人数
1	愛國	8	4
2	岩倉	5	
3	蒲田女子	10	1
4	都立青梅総合	2	
5	都立大島	3	
6	都立科学技術	2	2
7	都立北豊島工業	1	1
8	都立江東商業	10	
9	都立忍岡	10	2
10	都立第五商業	2	
11	都立農業	10	1
12	都立農産	9	4
13	都立町田総合	4	
14	都立瑞穂農芸	10	1
15	都立六郷工科	1	
16	国際理容美容専門	10	
16校	高校の部 小計	97	16

入選校数 8校

1	青山製図	7	1
2	国際デュアルビジネス	1	1
3	中央工学校	4	1
4	ホスピタリティツーリズム	6	
4校	専修の部 小計	18	3

入選校数 3校

校種(入選校)	応募人数	入選人数
中学校 34校 (13校)	155	22
高等学校等 16校 (8校)	97	16
専修学校 4校 (3校)	18	3
総計 54校 (24校)	270	41

平成二十三年度 作文選考委員名簿（順不同・敬称略）

(順不同・敬称略)

あとがれ

「明日に生きる」第二十二号の発行にあたりまして、会員校の先生方のご指導・ご協力、生徒・学生さんのご努力、さらに選考委員の先生方のご尽力によつて、ここに発行の運びとなりましたことを心より感謝申し上げます。

本年度の応募作文の数は、中学校一五五編、高等学校九七編、専修学校一八編、合計二七〇編でした。昨年度に比べて中学生からの応募は増加しましたが、高校生・専修学校生からは減少してしまい、全体で約六%少なくなりました。今後多くの生徒・学生さんからの積極的な応募を期待しております。

入選者の表彰式は、平成二十三年十二月十九日に都庁第二本庁舎一階の二庁ホールにおいて、本会役員・選考委員の出席を得て、多くの保護者と引率の先生方の参加の下で行われました。関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

この入選作品集の編集に当たっては、人権に配慮するとともに、明らかな事実誤認を除き「原文尊重」を基本といたしました。誤字・脱字については、明らかなものについては直させて頂きましたが、その他は原文通りです。

生徒・学生さんが、就業体験やボランティア体験等を通して学びえた職業観や自己の生き方などを、これから社会生活に活かし活躍することを期待します。また、この作品集が会員学校はもとより、教育関係諸機関等において広く活用されることを願っています。（生）

明日に生きる 第二十二号

—作文コンクール入選作品集—

平成二十四年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒163-1801 東京都新宿区西新宿二丁八一
東京都教育局都立学校教育部高等学校教育課内
電話 ○三一五三二〇一六七二九
FAX ○三一五三八八一一七二七

印刷 有限会社東京プリントック